

393-756



1200501462632

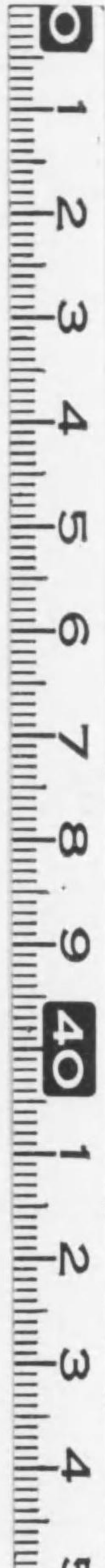
393

756

東西研究講座
第五十輯

宇宙論
衡

高瀬武次郎 著



始



文學博士 高瀬武次郎著

口複写

宇宙論衡

東亞研究講座
第五十輯

東亞研究會

393-766

目次

第一章 總論 一

第二章 宇宙論より見たる天 九

 第一節 發端 九

 第二節 形體的天 二四

 第三節 主宰の意義を有する天 二〇

 (イ) 天變地異 二七

 (ロ) 生生の作用 二四

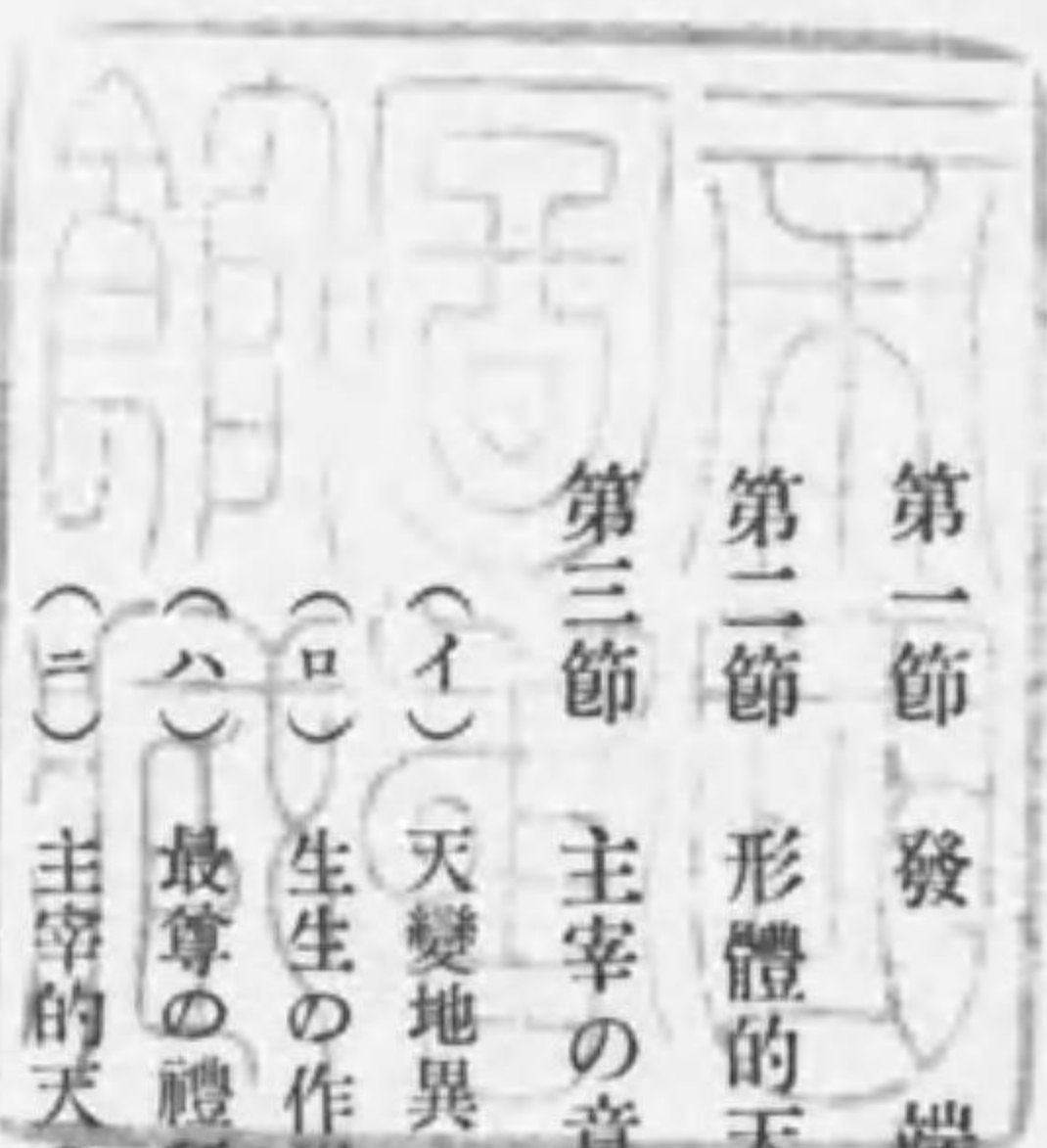
 (ハ) 最尊の禮拜物としての天 二七

 (ニ) 主宰的天の例證 三一

 第四節 運命の意義を有する天 四〇

 (イ) 制限的宿命説 四三

 (ロ) 極端なる宿命説 四七



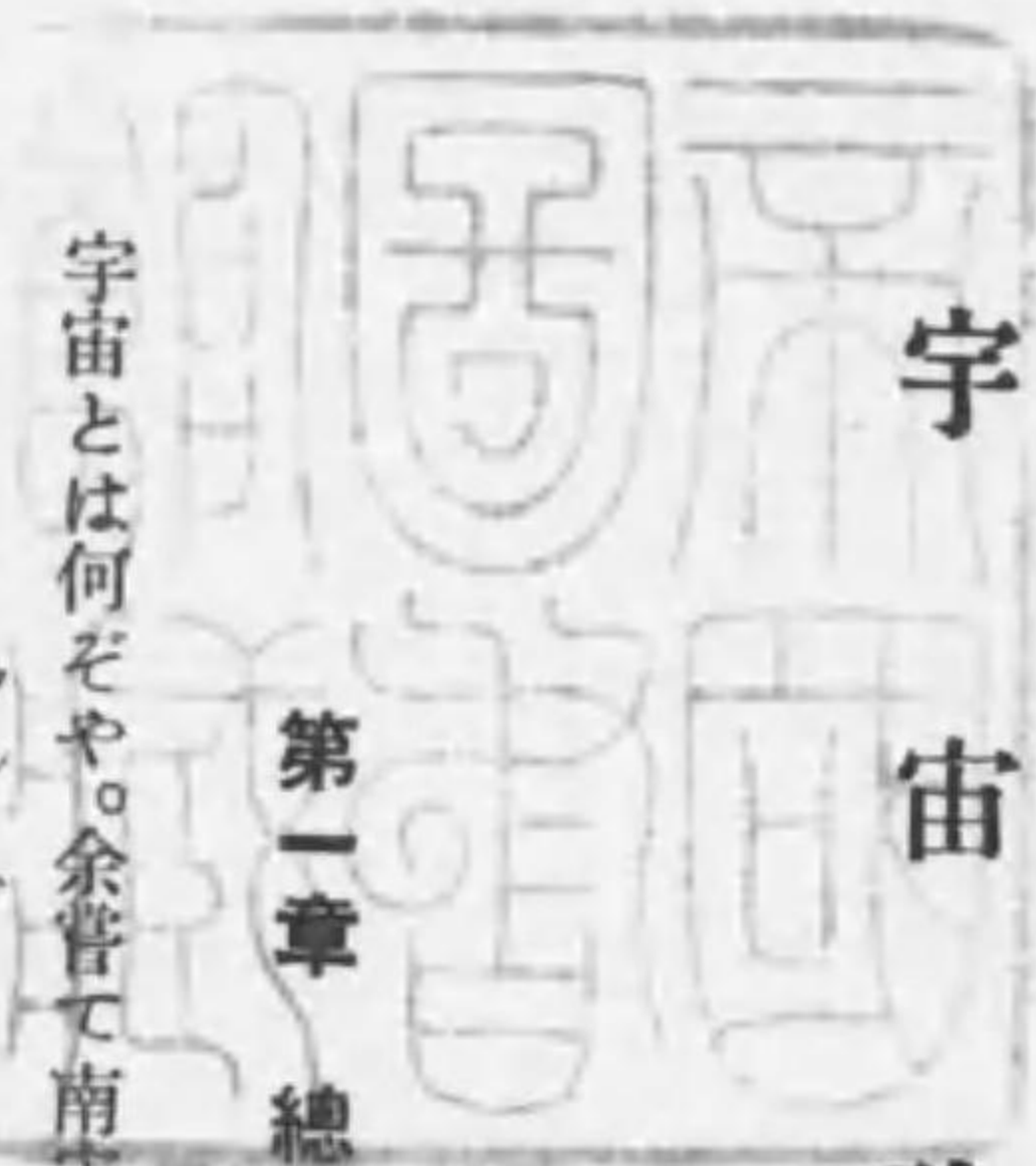
第五節 理てふ意義を有する天……………五二

理法的天の例證……………五三

第二章 宇宙の主宰たる太一神の論……………五九

- 一 靈符法章は易より來れる事を論ず……………六九
- 二 太一神の靈像の本旨を論ず……………七〇
- 三 偶像假作の理由を論ず……………七一
- 四 偶像は何故に人の形を假用するか……………七二
- 五 靈像と符章との用途の正邪……………七三
- 六 靈像を禮拜するは報本の爲なり……………七四
- 七 劉氏は孝徳を以て靈符を感受す……………七五
- 八 靈像に神仙の字を加ふるは後人の附會なり……………七五
- 九 靈像祭祀は何人も之を行ふべし……………七五
- 十 消災受福を論ず……………七六

第四章 鬼神論……………七六



宇宙論 衡

第一章 總論

文學博士 高瀨武次郎 著

宇宙とは何ぞや。余嘗て南宋の陸象山の傳を讀むに曰く、「象山十三歳の時、古書に宇宙の字を解して四方上下爲レ宇、往古來今爲レ宙と謂へるを讀むに及び乃ち大に省悟して曰く『元來無窮なり、人は天地萬物と與もに皆な無窮の中に在り』と、象山は常に天地窮際如何の疑問を懷きしが此時に至りて渙然として氷解せり云々」と。此文に徴すれば四方上下を宇と爲すとは即ち無邊の空間を總稱し、又た往古來今を宙と爲すとは即ち無限の時間を總稱するに非ずや。而して象山が繙きし所の古書とは果して何書なりしか、前漢の淮南王劉安の著に係る淮南子の齊俗訓に道至ナル眇者無ハシ度量、故天之圓ハ也不得レ規、地之方ハ也不得レ矩、往古來今謂ヒ之宙、四方上下謂フ之宇、

道在^{ヘテ}其間^ニ而莫^シ知^ル其所^トと云へるは支那に於ける最も古き宇宙の二字の解釋の出典なるべし。但し象山が讀みたる古書が果して淮南子たりしや否やは今之を確知するに由なし。

吾人が平素使用する所の宇宙の二字は、蓋し淮南子の此の句より出でたるものならん。今試に之を現時普通の字典に徵せん、殊更に普通の字典に徵するは一人の説を擇ばずして一般の説を知らんが爲めなり。字は無限の時間として淮南子の語四方上下^ヲ爲^ス字^トを引きて説明し、且つ字は随つて字内と連熟しては天下の義と爲り、宇宙と連続しては世界の義と爲ることを示せり。

因みに言ふ、又た字縣と云へる語あり、字とは宇宙にして、縣とは赤縣神州なり、即ち漢土の異稱にして、支那のことなり。字縣といふ語の出所は史記の秦本紀に大矣哉^カ字縣之中、承^ス順^ス聖意^トと見えたり。又た赤縣神州といふ語は史記の孟子荀卿列傳中の騶衍の事を叙するの條に在り。猶ほ赤縣神州の事は騶衍の世界觀なれば後に別に説明する所あるべし。

次に宙とは大空即ち「そら」又は「あめ」と云ひ、随つて宇宙と連熟しては天地間又は世界の別語と爲ることは既に宇の字に就て述べたるが如し。宙が無限の時間たることは淮南子の往古來今^ヲ爲^ス宙^トの語より來れりといへり。

東洋の書籍に見ゆる宇宙の字義は大抵上述の如くにして盡きたりと信ず。英語にては之を Cosmos と云ふ、而して宇宙論は之を Cosmology と云ふ。即ち天地萬物の根本的原理を論究するものなり

今吾人が此所に宇宙論と云ふ題を掲げたるは主として古來東洋に起れる哲學者が唱へたる説を歴叙通論し之に由りて諸家の説を知ると同時に、宇宙の何物たるかを推究せんと欲するものなり。古來諸家の宇宙論を歴叙する間には哲學的に宇宙本體及び現象を論ずるは言を待たず、時々宇宙の原理に本づきて天地の主宰者たる神の存在を立證するの機會に遭遇すべし、換言すれば吾人が論究の歩を進むる間には哲學宗教の兩方面に互るべきこともあらん。然れば宇宙論即ち天地開闢論と名くると同時に或は之を宇宙神靈論と名くるを適當とする場合に逢着することあるべし。今は東洋哲學史上の宇宙論通觀を要旨とすれば、唯だ支那に限らずして我邦に起れる宇宙觀にも及ぶべく、又た往々にして印度及び西洋の哲學宗教をも參照して吾人の論旨を明かにすることもあらん。

宇は四方上下なりと謂うて言辭の上に於て簡單に無限の空間を示し得れども、吾人が今此際

間に方りて實際に之を沈思冥想するときは、只だ茫々漠々として其際涯を知ることなく其首尾を知ることなし。

且又た宙は往古來今又は古往今來なりと謂うて言辭の上に於て無限の時間を示し得れども、明瞭に吾人が愈々之を精思熟考するに當りては、唯だ悠久杳渺として其始を知ることなく又た其終を知ることなし。

惟ふに此の如く渺茫たる宇宙を論究せんとすることは恰も一種の謎を解くに似たるものあらんか、而して古來何人が果して能く此謎を解き得たりしや、最も巧妙に此謎を解き得たる者は即ち最も卓越せる哲學者と謂ふべきならん。今吾人は假に謎の比喻を用ふるも決して夫の宇宙を以て不可解なりと浩歎して之を厭棄するの徒とは同じからざるなり。吾人が試に謎の比喻を用ふるは唯だ宇宙論の容易ならざることを示さんとするのみ、宇宙豈に絶對的に不可解なる者ならんや、吾人若し能く順序を追うて討原し漸次解決の歩を進めば必ず其蘊奥を探知することを得るに至らん。吾人が試に東西の哲學史を繙かば數千年前よりして既に幾多の大哲學者起り宇宙を論究して其卓説を遺せり、然れば此等先哲は實に吾人の論究の先驅を爲したるものと

謂つべし。

設令ひ一人の先哲が宇宙全體の眞理を闡明し得ざりしとするも、亦た能く一部の眞理を把持したる所あらん。各自一部の眞理を發明したりとせば多數の哲學者の説を参照して之を考究せば、必ず能く宇宙全體の眞理を見ることを得るに至らん、且又た古今東西の多數哲學者の所見が全然相一致する部分が有りとせば、是れ即ち正確に其の眞理を發見し得たる所と見るべからん。

又た案するに人は固より宇宙萬物の一物たるに過ぎず、縦令ひ人は萬物の靈長たりと雖も萬物中の一物たる者が宇宙の全體を窺ひ知らんとするは固より困難なる所なるべし。然れども吾人は斯の場合に於て古來の哲學者が宇宙を論究するを以て徒らに衆盲が象を評するに比する者に非ざるなり、唯だ難中の難たることを知らしめんとするのみ。

却説、支那に於ける道家及び道教の宇宙觀は如何と云ふに老子の宇宙論は支那に於ける最古のものにして毫も外國思想の影響を受けず眞に支那特發のものと爲すのみならず、其後今日に至るまでも東西古今に比類なき特徴を有するものなり。老子の學説を繼承せる關尹子、文子

列子、莊子、淮南子等亦各其の宇宙論を示せり。今此所に少しく注意すべき事あり、即ち淮南子の思想は我國の歴史、日本書紀の神代卷にも幾分か影響せるの痕迹を見れば則ち道家の宇宙論が我國の天地開闢説に参照されたりと謂ふべからん、日本書紀の著者舍人親王は其傳に徴するに「聰明にして學を好み廣く諸子を究む」とあり、蓋し親王は支那周末秦漢時代の諸子百家の書籍を涉獵して其の日本固有の天地開闢説を叙ふるに際して淮南子等の文を引用したるものならんか。猶又太安麿の古事記の天地開闢説にも亦た支那思想を混入するものなきや、猶ほ別に論ずる所あるべし。淮南子の後ち晋の時代に道士葛洪ありて抱朴子を著はして一種の宇宙論を爲し、其後ち唐末五代の頃に世に出でたる道教の大家、陳圖南の如きも亦た一種の宇宙觀を示したり、而して圖南の思想は北宋の儒學に影響する所尠少ならざるなり。

又た儒家の思想は支那の最も重要且つ顯著なるものにして、太古より漸次發達し來り堯舜禹の時代に至りて著しく顯はれたることは尙書の二典三謨等の諸篇に徴するも明かなれども、此頃には未だ宇宙觀を窺ふべき資料なく、唯だ主として治國平天下の實用的教訓を示せるのみなり。

り。殷末周初に於て箕子が示したる洪範の一篇は支那古來の思想の溜れる湖水の如く種々なる思想を含藏し既に五行説の萌芽を出だせり、後世に至りて必ず宇宙論に現はるゝ五行説が其端を洪範に發したることは何人も否定すべからざる所ならん。然れども殷末周初には未だ特に哲學的に宇宙觀として見るべきの説を示さず、周末春秋の頃に至りて孔子出で祖述堯舜、憲章文武の業を遂げ以て儒教を大成したる時、太古伏羲氏より既に端を發して周の文王、周公を経たる思想は一部の易經として孔子の手に由りて編成されたり、此の一部の周易には明かに其中に太極といふ語を示し、其説至て簡單なりと雖も確に宇宙觀の發端を爲したり。此時より後ち易經は支那思想の淵源と爲りて支那古今の哲學思想に甚大の影響を及ぼせり。孔子の學を奉ぜる七十二子、孔子の孫子思、又た子思再傳の弟子孟子、猶又た孔門子夏の系統を傳へたる荀子の如きは主として修齊治平の道を説きたれば特に宇宙觀を示すものなけれども、孔門の諸子及び其の流を汲める賢哲の遺書を緝けば自ら一種の宇宙觀の窺はるゝは、争ふべからざる所なり。何ぞや、曰く天即ち皇天上帝の大觀念是なり。儒家の聖賢が天を呼び天命を口にする處に自ら共通的にして又た根柢的なる大觀念の潜在することは深く注意すべき所なりとす。秦漢を経て

魏晉六朝隋唐に至るまでの間に儒教は多數の碩儒を出だしたれども、未だ顯著なる宇宙觀を示したるものを見ず、但だ漢儒は陰陽五行説を立つる間に於て自ら一種の宇宙觀を示さざるにあらず。北宋に至るに及で所謂近世哲學即ち宋學勃興して宇宙論を唱へ周濂溪を初として邵康節二程子、張橫渠等各自其説を發表せり。南宋には朱子出で、遠くは支那從來の諸種の思想、近くは北宋諸大家の説を採て自家哲學組織の用に供し、近世哲學の完全なる基礎を置けり、其の宇宙論は頗る觀るべきものあり。又た陸象山、王陽明の系統にも自ら一種の宇宙觀を示せり。

却説、周末に起りて儒教に反對して立てる墨家は宛然耶蘇教の所謂ゴッドに似たる主宰者を説きて之を天と名け、宇宙萬物は天の生じ天の支配する者なりとの意見を示せり。儒墨二家の天を説く所は大に類似したる點あれども、墨家は亦た自ら一種の特徴を有せり。又た皇天上帝を太一神と名けて宇宙觀を爲す者も亦た考究すべきものならん。我邦の固有思想なる天地開闢説は特に之を論述するの要あるべく、内外兩思想の混融せる程度も亦た一應の考察を價するものならん。

第二章 宇宙論より見たる天

第一節 發端

吾人人類の腦裏に印する天の觀念は頗る廣く頗る深きものなれば、宗教哲學倫理學を窺はんと欲する者は最初に之を熟考せざるべからず。故に吾人は宇宙論の劈頭第一に此の重要な問題を詳論せんと欲するなり。

凡そ古今の書籍中に用ひられたる天の意義は大別して二種と爲すべし、曰く有象の天、曰く無象の天是なり。有象の天とは則ち形體を以て言ふものなり、之を單に有形的天と名くべし、此の有形的天は最も多く古今の書籍に散見する所なり。而して此の意義の天は大抵の場合には天地と相對して用ひらるゝを見るなり。之を例せば地平天成と云ひ、天覆地載と云ひ、天尊地卑と云ひ、塞乎天地と云ひ、天長地久と云ひ、天地無窮と云ひ、譬如天地之無不持載無不覆幬と云ひ、謂天蓋高不敢不局、謂地蓋厚不敢不踏と云ふが如し。

然れども又た天のみにて使用せらるゝ語も少からず、例せば巍々乎唯天爲大と云ひ、夫子之

不^レ可^レ及^也、猶^ト天^之不^上可^ニ階^而升^也と云ひ、浩^々滔^々天^と云ふが如し。又た蒼穹と云ふ語は形より見て蒼々たる穹形を呈する天を指し、且つ邦語ヒサカタ即ち瓢形と云ふも之と同様にて天の形體の瓢の如き形狀を示せるを示すものならん、而して古代には東西兩洋の別なく天は圓形にして地は方形なりとの説及び天は動き地は靜なりとの説一般に行はれしが故に天圓地方の語も往々にして古書中に散在せり。西洋に於ける天動地靜説を唱へたる人は著名なる埃及の地理學者數學者たる「トレミー・クローデイウス」Ptolemy, Claudius なり、彼の説は靜なる地を中心として太陽及び諸遊星は動きつゝありと云ふ説にして廣く世人に信ぜられたり、故に古代の書籍には天動説に従へる語多く散見せり。「トレミー」の説は紀元十五世紀頃迄は普ねく信ぜられたれども其後「ヴェニス」人及び「ポーチュエガル」人の中には疑を挟む者起れりと云ふ。

紀元千五百年の頃に「プロシア」人「コペルニクス」、「ニコラス」Copernicus, Nicholas といふ有名なる星學家は「トレミー」の天動説に反對して地動説を唱へたり。又た紀元千六百四十二年に伊太利の高名なる星學家「ガリレオ」Galileo も亦た天動説を覆へして地動説を唱へたるが其時彼は耶蘇教より猛烈なる迫害を蒙むりたれども毫も屈する所なく、驟然起て天體は地球を

中心として動くものなりとの自説を固守したり。斯く地動説出でたれども猶ほ充分に世人を信ぜしむるの證據を與ふることなかりしも「コロンブス」Columbus の亞米利加發見等の大事件に由りて地は球形なることを確認し天圓地方説は破るゝに至れり。上述の天圓地方説の成敗及び天動地靜説の立否は、天地開闢論上には至大の關係を有するものなれば此所に之を附記せり。

却説、支那に於ける天圓地方の語の例を求むるに呂覽に天道圖（圓に同じ）地道方とあり、之より人の頭は天に象りて圓く人の足は地に象りて方なりと云ふ説も起れり、且つ魂歸^レ天、魄歸^レ地と云ふ語は天を以て人の靈魂の歸着する所にして一種の世界の如き意義を有するに似たり。古經中には往々にして皇天上帝若くは祖先の靈は天上に在ますとの語あり、又た是れ一種の有形的天と謂つべからん。又た天文學上に謂ふ所の天體も此の天の種類に攝すべけん。次に無象の天は更に別ちて有靈的天と無靈的天と爲すべし、有靈的天とは即ち主宰者の意義を有する天を云ふなり、有靈的天は種々の語を以て表はさるゝことあり、例せば帝と云ひ、上帝と謂ひ、皇天と云ひ、天帝と云ひ、神と云ひ、上天と云ふ等あり、又た時には獨一主神の意味を含むことあり、或は造物主若くは造物者と云ふ語も有靈の意義を附することを得べく、宇宙論には

最も緊要なる關係を有するものなり。總じて有靈的天は崇敬の念を生ぜしむるもの多し、試に説文を見るに其の段玉裁の注に曰く、天も亦た凡ての顛の稱と爲すべし、臣の君に於ける、子の父に於ける、妻の夫に於ける、民の食に於ける皆な天と曰ふ是なりと、即ち是れ皆な尊重の意を示すものなり。猶ほ古書を繙けば天は下土の萬民を照臨すと云ひ、又た天は萬民を支配して之に賞罰を與へ儀法を示し、之を教養するの作用を施すもの、如く思惟せることを知るべし。是に於て此の種为天は畏敬すべきもの、代表語とも爲れること少からず、例せば吾邦にて古來用ひられたる語にも妻が良人を所天と云ふが如き其の尤も卑近なるものならん、猶ほ又た侮るべからずとの意味より民を指して天と云へるあり、或は美德の人を指して天と云ふもあり、有靈的天は毎に嚴肅なる畏敬すべき場合に用ひらるゝこと多し。此意味より宗教に於て神を尊稱するに天の字を用ふるに甚だ多し、特に我邦の神代の神名にも天之御中主神を始として天の字を用ひたる例甚だ多きを見るべし。次に無靈的天は更に之を二種に分つべきものあり、曰く命、曰く理法是なり、命とは則ち運命若くは命數若くは宿命或は單に運と云ふ語を以て表はさるゝものなり、非命論者たる墨子が口を極めて排撃せし所の命は則ち此の運命説なり。佛教

の如く過去現在未來三世を説く者の所謂因縁因果といふ語も世俗に用ふる場合には大抵此の運命的天の意義に攝すべきに似たり、又た理法といふ意義を含める天は自然の法則若くは原則又は理性と云ふ如き語を以て言ひ顯はすべきものにして、多くは哲學思想の非常に發達せる宋明時代の性理學者に用ひられたるものなり。然れども古來の經傳にも固より此種の天なきには非るなり。

惟ふに天の意義は率ね以上に述ぶる所の種類を出でざるべし、而して此の數種の意義は如何にして漸次發達し來れるかを討究するは吾人の最も緊要とする所なり。現今は言ふことを待たず、古代に在りても此等數種の意義を含有したる後は機會に應じて種々に使用せられたるもの如し。夫の書經易經詩經の如きは世界最古書の中に數へらるゝものなれども天の意義は頗る多様なるを見るべし。此れを以て推究するときは書契以前よりも早く既に人々の口語に於て種の天の意味を言ひ表はしゝならんか。然れども是れ唯だ推測に止まりて其證を今日より知ること能はざるなり、吾人は唯だ稍正確なる書に憑依して之を攻究推定するより外に更に良策あらざるべし、而して詩書易等の最古書も亦た既に多様の意義の天を含めば、最初の天の意義が

何なりしやは唯だ吾人推測に由りて定むるの外なからん。吾人が平素の考究に據れば最初の天の意義は單純なる可視的形體の天たりしことを知るなり、故に吾人は此の推定に従ひ形體的天の討究より漸次歩を進めて全體の意義を知らんと欲す。

第二節 形體的天

先づ順序として古來の天の字に關係する解釋を見るに後漢の許慎の説文に曰く、天、巔也、至高無上（上从一）、一、大と、此説明は天とは唯一にして最高最大の者たることを示すものなり、而して一と云ふ字と大と云ふ字とを意味を以て合せて構造したる文字を示せり、之を六書に於ては會意の字と云ふ、六書とは漢字構成法に六種の方法あるが故に之を六書と名く、其の中に會意と云ふ構成に由りて造られたる文字なりとす。

次に一と大との字を考ふるに説文に曰く、一、惟初太極道立於一、造分天地、化成萬物、一之形於六書爲指事と、蓋し一は六書の中には事を指して定め作りたる字なり、一線を引きて其れを一事と指して一と爲したるを云ふ、若し二事又は三事あるときは二線又は三線を畫して二又は三と爲すも此類なり、且つ大の字は説文に天、大地大人亦大焉、象人形とあり、清

の段玉裁の注に謂へらく、按ずるに天の文は一大に従へば則ち先づ大の字を造るなり、凡そ八の文は但だ臂と脛とに象る、大の文は則ち首も手足も皆な具はりて以て天地に參はるべし是を大と爲すと。以上の一と大との二字より天の字を造れるなり。

爾雅に曰く、春爲蒼天、夏爲昊天、秋爲旻天、冬爲上天と、是れ蓋し四時の狀況に應じて名を附したるものなり。但し此の四種に就きて古來の解釋者の説區々なるを見る、詩經の毛公の傳に曰く、尊而君則稱皇天、元氣廣大則稱昊天、仁覆闔下則稱旻天、自上降臨則稱上天、據遠視之蒼々然則稱蒼天と、皇天、昊天、旻天、上天、蒼天の五種の意義は唯だ最後の蒼天のみを可視的なる形體的天に攝すべく前の四者は不可視的なる無象の天に攝すべし、今は唯だ序を追ふて之を記述せしのみなり。

猶ほ前漢の劉熙の釋名に謂へらく、天は豫、司、兗、冀（地方の名）には舌腹を以て之を言ふ天は顯なり、上に在りて高顯なり、青、徐（地方）には舌頭を以て之を言ふ天は坦なり、坦然として高くして遠しと。是れ蓋し地方の音に従うて意味を附したるものなり、然れども吾人は此の兩意味を採り在上高顯と坦然而遠とを以て天の意義を説かんと欲す。

以上に引用せる語に就きて見るも天は至高無上、唯一最大なりと云ひ、高顯と云ひ、高遠と云ふは皆な人が天に對して懐ける觀念を示すものにして之れより漸次他の數種の觀念は生じ來るなり。吾人が世界に於て最大唯一なるものと云へば直に宇宙の主宰者たる神を想像するに至る者あらん、耶蘇教に所謂「ゴッド」は蓋し之れに似るものあらん。

猶ほ一言附記せんか、形體的天と無象有靈的天とは英語の「ヘヴン」Heaven に就きて考ふるも直に之を知り得べし、例せば西諺に天は自助者を助くと云ふ句の Heaven helps と云うて天が助くるとの意味の中には自ら一種の意志を有する神靈を含むべく、Heavenly body、天體と云ふときは唯だ天文學上に用ふる形體的天にして目を以て視るべきものなり。一層精密に討究すれば此の「ヘヴン」の字にも種々の意義を含むこと恰も東洋の天の字に似たるものあらんか其の詳しきことは他日に譲る。吾人は以下に顯著なる古書に就きて形體的天の例證を掲げんと欲す。

尙書の堯典に徴するに曰く

乃命羲和若昊天曆象日月星辰、敬授人時、

と、是れ曆學上より云へる昊天なれば形象ある天なるべし、同く胤征篇の昏迷于天象と云へるも亦た之に同じく、盤庚中篇の天時も亦た之に同じきものなり、同く大禹謨篇に水土治り五行叙するより云へるも天地と對稱し形象を以て云へるなり、復た堯典及び益稷篇に見ゆる滔天と云ふ句は皆な形體を以て云ふなり。

盤庚中篇に予迓績乃命于天と云ひ、西伯戡黎篇に嗚呼我生不有命在天と云へるは語意より察するときは形體にして稍天界の意味あるが如し。

詩經を見るに左の語あり。

悠々蒼天(王風黍離篇)、彼蒼者天(秦風黃鳥篇)、謂天蓋高不敢不局、謂地蓋厚不敢不踏(小雅正)

文王在上、於昭于天(大雅文王篇)、三后在天(大雅下武篇)と云へるは明かに一種の神靈の存在する天界の意味あれども、天の高顯の意味より云へば亦た形體的に屬すべし。後世の詩文に仰彼蒼といふ句あり、此の意味を考ふるときは唯だ形體ある可視的天を指すのみならず、蒼々たる彼の高き天界に存在する神靈に哀を訴ふるものなり、亦た以て参考すべきならん。

詩經に倬彼雲漢爲章于天(大雅棫樛篇)と云ひ、又た焉飛戾天(大雅旱麓篇)と云ふ如きは形體的な

り。
 又た易經の繫辭上傳に天尊地卑乾坤定矣と云ひ、又た同傳に法象莫大乎天地と云ふ如きは主として可視的天地を以て説けるものならん、猶ほ形體的天の例は禮記等の經典に多く見ゆるが如し。

論語及び孟子に徴するに曰く

巍々乎唯天爲大(泰伯篇)、夫子之不可及也、猶天之不可階而升也(子張篇) 以上論語の句

は明かに形體を以て云ひ、一は大を示し、一は高を示せるものなり。

天之高也、星辰之遠也云云(離婁下篇)、天油然作雲(梁惠王下篇)、塞乎天地之間(公孫丑上篇)と云へるは皆な可視的にして有象的天なり。

又た公孫丑下篇に天時不_レ如_二地利_一、地利不_レ如_二人和_一とあるは星學に關する天にして又た特に天時の解釋には讖緯家の言ふが如き説を爲す者あれども、天の形象に干係するが故に之を形體的天に攝すべきなり。

以上に掲げたる詩書易論孟等の語は形體的天の例證としては殆ど餘蘊なかるべし。其他古今

東西の書籍に見ゆる所の天の語を求むるときは極て夥多なるべく、且つ此種の天は最も單純にして人の善く熟知するものなれば多數の例を要せざるべきならん。

吾人は既に形體的天の例證を掲げ了りたれば更に進て形體的天の特徴を討究せんとす。而して此の天の特徴は他の意義の天と最も緊密なる關係を有すれば、深く意を注ぐべきものと爲す。

形體的天の特徴とは何ぞや曰く

- 一、天の形象の燦然として光輝を放てること
 - 二、其の位置の悠々として杳遠なること
 - 三、其の形體の巍々蕩々として高大廣遠なること
 - 四、其の體の唯一最大にして至高無上なること
 - 五、其の體の廣大至高にして人類及び萬物を覆載すること
 - 六、其の茫々漠々無窮無際にして奇異幻怪なる現象を呈するに適するものなること
- 上掲の有象的天は唯だ形體的方面のみを説きしが故に只だ沈靜にして空濶なるのみにして何等活動の迹なけれども、此の天が能く大凡上述の六種の特徴を具ふるより推考し、復た之が如

何なる作用を發し得るかを熟察するときは、次ぎに起り來るべき天の意義を推知することは決して難からざるべし。請ふ進で主宰的天の意義を論究せん。

第三節 主宰の意義を有する天

吾人が主宰的天を論ずるに當りて二種の見解あり、一は無始以來實際宇宙間に獨一主宰神の存在するもの即ち宇宙有神なるを吾人が種々なる事變等より漸次發見感知するに至るものとする者是なり。他は最初より實際は獨一主宰神は存在せざりしも、唯だ吾人が宇宙間に其神の如きものゝ存在するかの如き觀念を懐くに至れるのみとする者是なり。換言すれば前者は神は實在なりしも吾人が未知なりしが漸次熟知するに至るなり、後者は唯だ種々なる概念を總合して神なる觀念を成立し一旦成立したる以上は永く牢乎として抜くべからざるに至るなり、然り而して今吾人が論證せんとする方法は前者にも後者にも適合するものなれば之を兩説に採用すべけれども、吾人の最後の目的は前者に在り即ち結局宇宙神靈の實在を認識せしめんと欲する者なり。吾人は今より漸次此の目的に向つて歩を進めん。

無象にして有靈なる天は主宰的天の中に攝すべきものなり、蓋し主宰的天の意義を生じ來るには數多の原因あるが如し。換言すれば宇宙神靈を認識するに至るには種々なる階梯あるなり左に其の著明なる者を列叙せんと欲す。

(イ) 天 變 地 異

夫の朦昧なる最初の人類は衣食住の具に於ても才能技藝に於ても實に劣等なりしことは歴史に徴し人類學考古學等に由りて推知し得べきなり。斯かる朦昧なる人類が初て渺漠たる天地の間に棲息するときは果して如何なる感を懐くべきか、且つ東洋特に支那の如き荒蕪たる原野に住居する者は廣大無邊なる天地に對して如何なる感を抱きしか。各國の人民は等しく最初朦昧の時代を経過したること疑なきも、特に其國の地勢に依りて其の天地に對するの感想は固より一様ならざるべし。

佛國の哲學者にして政治家なる「ヴィクトル・クーザン」Victor Cousin, (1792-1807.) は嘗て思想發達の順序を論じて三時期ありとして曰く、一、無限の思想の時期、二、有限の思想の時期、三、無限の思想と有限の思想との相調和するの時期是れなり。無限の思想の時期とは蓋し人類の初めて世に出づるや、萬事茫漠として際涯なく自ら其の生存する所以を悟ること能はず

其の心に感ずる所は只だ自己の薄弱と天地神明の如き無邊不常の事物に依頼するの情とのみにして未だ一個人といふ如き思想は起らざるなり、斯かる時に際しては萬事漠然として無限の觀を呈せざるはなく、絶對無窮等の思想獨り其の心中に蟠れるのみと、又曰く、無限の思想を代表する國土は内には曠原峻岳を包容し、外は大洋に瀕するの大陸ならざるべからずと、又曰く無限の思想の地は亞細亞なりと、第二期第三期の説明は今必要なれば之を略す。此説を參照するも支那の地勢が無限の思想を懐かしむるに適するを知るべきなり、況や支那太古の人民は黃河一帯の曠野に棲息し、山岳に接し、洪水に遭ひ、氣候寒烈、土地礪确、天然の恩惠甚だ少きをや、然れば彼等太古の人民が自然の暴威に弄せられしは想見するに餘あり。現今に於て考ふるに何人も平日天晴れ氣朗かなる時は天然の愛すべきを思ひ、春花を賞し秋月を觀るときは自ら天地の情あるを感ずれども、若し一旦天變地異に遭遇するときは忽ち天地に對して畏懼の念を生ずるに至らん、況や太古に於ける無智の蠻人をや、否な特に太古の蠻人のみならず、今日に於ても文明國を遠ざかれる野蠻國の民は天然の暴威に對しては恐怖の念を懐かざるはなし。却説、天には前に述べたる六種の特徴ありて宇宙間の何物にも優る者なる上に、人力の到底

抵抗すべからざる猛烈なる作用を爲す時は自然に一種の神靈の不可思議なる勢力を想像するに至るべからん、此の時は恰も人類以外に靈物ありて其の意に任せて我を賞罰するが如く或時は慶雲和風或時は暴雷疾風殆ど測るべからざるものあり。天變地異に遭遇して絶對無限の怪力を感ずる時は此所に無象にして有靈なる主宰者を思惟するに至るべし、斯かる思想は文明の或程度に進歩せる世にも存するものなることは之を古經に徴して知るべし。

尙書の周書の金縢篇に曰く

秋大熟未穫天大雷電以風、禾盡偃、大木斯拔、人大恐、又た曰く王出郊、天乃雨反風、禾盡起、二公命邦人、凡大木所偃盡起而築之、歲則大熟と、此所に二公とは即ち太公召公にして王とは成王を指す、然れば周初武王成王の頃にも猶ほ天變を畏るゝこと此くの如し、況や太古の蠻民をや、其他古來暴雷の爲に震死せられ、自然の暴力に非命の死を遂げ慘憺たる悲境に陥りたる者は枚擧に遑あらず、既に神怪なる勢力を認めたる後は必ず其の何處より起り來れるかを考察するに至らん、之を討ね之を究めて遂に天に歸するに至ることは則ち前述の如く天が最も能く其の淵源たるに適當なればなり。

(ロ) 生生の作用

宇宙間に氣化流行し、春夏秋冬推移して萬物化生す、吾人の眼前は森羅萬象、榮枯盛衰消長變化して一瞬間も停止することなく、生生の作用千古此くの如し。此の不可思議なる生生造化の作用を見る者は誰か其の現象の奇異を感じ其の神變なるに驚かざらん。人類が此の作用に注意するに至れば必ず其の由りて來る所を考究せんと欲す。若し吾人が萬物の個々の物に就きて考究する時は各個に其の生生の主力あるが如し、換言すれば各物に生物主あるが如く思惟されざるにあらず。然れども斯かる個々生物主の觀念は到底久しく吾人の腦裏に留ることなかるべし、彼の個々の發生者ありとの觀念を出て一層抽象的なる造物者又は造物主の觀念を生ず、英文の中に花文字を以て記せる Nature 造物者といふ語は即ち此の造物者の意にして特に花文字を用ひたるは則ち神「ゴッド」の意を示せるなり。此くの如く此の造物者 Creature てふ觀念は何れの國民の腦裏にも在りて等しく起れる者なれば、獨り英語のみならず世界各國の語にも亦た之に該當するものあるを發見すべし。生生の妙用は其の大に於て其の多に於て其の微に於て其の秩序の井然たるに於て、其の品類發生の無窮なるに於て、其の品物の美醜精粗等の無數な

るに於て皆な悉く人を驚歎せしむるものあり。近年博物學者は科學的智識進歩し緻密なる研究を遂げんとする者は愈々進て愈々生生の妙用を驚歎するに至らん、何となれば物體の成分實質を分析的に精知するも、其の由りて來たる所を究むること能はざれば、決して又た彼等は一枚の葉をも造るの作用を爲すこと能はず、唯だ個々の物に就きて説明を爲し得るのみなればなり、説明の終局には必ず生生の不可思議なる作用を認めざるべからざればなり。此の妙用を認めれば必ず其の起り來る所を討究せんと欲す、之を討ね之を究めて遂に何れに達するか必ず天に歸するに至らん。蓋し天は何よりも一層能く神怪なる造化作用の淵源たるに足るべきものなればなり。

此種の觀念を古來の經傳等に徴するに、論語の陽貨篇に曰く、子曰、予欲無言、子貢曰、子如不言則小子何述焉、子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉と、是れ天は以て造物者たる事を示すにあらずや。又た詩の周頌の天作篇に天作高山、大王荒之と云へるも亦た造物主の意を含める天なり。又た莊子の天下篇に上與造物者遊と云ふ、蓋し造物者といふ語は之を以て最古と爲すべきか。宋の蘇東坡の赤壁賦に造物者之無盡藏也と云へる句あるは造物者

てふ語の著明なる者にして確かに天を以て造物者と爲すものなり。老子は道德經の第六章に天地生生を説きて曰く、天地不仁以萬物爲芻狗、聖人不仁以百姓爲芻狗、天地之間其猶橐籥乎、虚而不屈、動而愈出と、此の句には造物者といふ語なしと雖も、天地の自然に任じ無爲にして萬物自ら生生發育するを云ふなり、又た直に神靈の作用を説かされども、此間自ら神意なきにあらず、但だ老子は固より別に主宰者を説かず、唯だ道といふ一字を假説して宇宙論を立つればなり。易經には専ら天地生生の道を説けるが故に特に造物主てふ語はなけれども天の字は多く見え、大抵地と相對して生生發育の序を示せり、曰く、大哉乾元、萬物資始、乃統天、雲行雨施、品物流形(中)至哉坤元、萬物資生、乃順承天、坤厚載物、德合無疆、含弘光大、品物咸亨(上象)有天地然後萬物生焉、盈天地之間者唯萬物(序卦)と云へるは皆な天地の生生作用を説けるなり。易經には別に主宰の神を明言せざれども、天地生生作用の井然秩序あるを見れば自ら一種の靈物ありて之を支配するなるべしとの疑を生ずるならん。又た莊子の達生篇に天地者萬物之父母也と云ひ、尙書の泰誓上篇に惟天地萬物父母と云へり、泰誓篇は擬古文なれども天地者萬物之父母との意は殆ど易經に有天地然後萬物生焉と云へるに同じく、語意は殆

ど古今普通と謂ふべし。又た史記の屈原傳に天者人之始也、父母者人之本也と云ひ、荀子の禮論篇に禮有三本、天地者生之本也、先祖者類之本也、君師者治之本也、無天地惡生、無先祖惡出、無君師惡治と云へり、史記の禮書及び大戴禮の禮三本篇にも此語を引用せり。又た禮記の郊特牲篇に萬物本乎天、人本乎祖と云ひ、前漢の董仲舒は賢良對策に於て天者群物之祖也と云へり、且つ詩經の大雅烝民篇に天生烝民と云ひ、皆な天の生生作用を云へるなり、天の生生作用の靈妙なるは自ら一種の主宰の神を想像せしむるに至るなり。

(ハ) 最尊の禮拜物としての天

凡そ原始時代に在りては人智未だ開けざるが故に些少の奇狀を呈する現象に會へば忽ち畏れ其の甚だしきは之を神として拜禮することあり、而して何れの國民に在りても一度は必ず拜禮時代を経過したるの跡あり。佛國の哲學者「ピエール・ラフィット」 Pierre Lafitte (General view of Chinese civilization.) 謂へらく拜物教は物體を以て晉だに活動するのみにあらず、又た生けるものと思料するに在り、物體が呈出する種々の活動法は之を刺激する感觸及び欲望に歸するものなりと想像するに在り、約言すれば宇宙を人間に同化するに在りと。彼は更に詳かに拜

物教の起源を論じて曰く、吾人の智が依りて以て動作する所の基本的法則は何ぞや、吾人が最も疎遠なる所の現象を最も親近なる所のものに同化せんとするの法則是れなり、即ち語を換へて之を言へば人心の主要なる傾向は人間が知り得たる諸細目を概括して最も簡單なる臆説を作らんとするに在り。此の美妙なる太初哲學の法則は唯だ吾人人間の智が一大普通の事實を認めたるに過ぎず、夫れ吾人が最も善く熟知して着手の第一と爲すべき所のものは人間なり、吾人は吾人自身を自識せり、吾人の作爲は特別の感觸、動機、憤怒、親切、愛情等の爲に喚起せらるゝを認識せり、故に人間が生物其者よりも甚だ激烈なる動作を爲す所の外物、即ち奔流、暴風其他、物質中に特別強猛なる活動の存するを證する所の彼の浩大なる氣象學的現象を觀るに當りては、彼等は固より想像せん、斯の如き活動を現はす所の物體は人間の行爲を決するものに等しき感情及び意志を有すること必せりと。然れば拜物教は人智發達の順序に於て實際避くべからざるの一階段にして人心の原始的意向及び以て始むべき總念即ち智識より生ずる必然の成果なりと。而して其拜禮せらるゝ物體は千種萬類實に驚くべきものあり、且つ直接の拜禮物のみならず、種々の聯想上より禽獸等をも拜禮せんとするに至る、然れども拜物教に於て人智

の發達と伴ひ次第に高尚にして適當なる者を拜禮するに至るなり。「ラフィット」曰く、拜物教の最終段は天體禮拜なり、抑も此天然自然なる拜物教の影響を受け且つ都合善き天地の境遇に助けられ、一の社會が水草を逐ふの域を脱して定住の段階に達し、若干の人をして天體を觀察し、全力を擧げて純粹なる思辨的事業に従事せしめ得るの方法の充分に整頓するの時期に至るや、茲に自然普通なる拜物教の巔に於て彼の蒼穹の遠體に歸するに命令權を以てする所の一層法式的なる拜物教は誘起せらるゝなり、而して注意ある觀察者は直に證明せん、天體は實に至大至強の勢力を以て吾人人間を支配するを、要するに拜物教は人心必然の起點にして天體信仰は其最終なる而かも法式的なる元素なりとすと。而して支那の拜天は實に著しき發達を爲せるなり、支那は古來無數の祠堂祭壇を設けて山河星辰天地を祭れり、且つ死者の靈魂を拜禮することも亦た甚だ發達せり、而して靈魂の在ます所は實に天なりとせり。支那に於ける拜物教は敬天の禮に依りて一の制度と爲れり、而して其制度の濫觴は實に悠遠なる時代に在り。

以上述ぶるが如くして天は實に最上の勢力を有する拜禮物と爲れり、其の作用は以て他の萬物の活動を整理するに足るべき強大なるものなりとす。茲に至りては既に充分に宇宙主宰の神

たるの意義を天に附せるなり、且つ此所に注意すべきは天を以て主宰的神とするときは既に無象有靈たること是れなり。唯だ其の勢力の發現を認むるには種々の現象を假るべし、拜天の式を行ふ時に當りては必ず仰て彼の蒼々たる形體に向ふ、是れ元來主宰的天は形體的天より起り來れるものなれば、到底蒼天を離れては拜天の意を充たす能はざるなり、故に蒼天に向ふて拜禮するなり、且つや支那に於ては主宰的天を信するも未だ上帝は天地間の一切の處に遍在するとの觀念を抱かず、多くは唯だ夫の至高無上の處より照臨するものと爲せり、然り而して拜天式には直接可視的現體を目的と爲すなり、蓋し天の現體も已に充分拜禮せらるべきの現象を有すればなり。「ラフィット」又た曰く天は一目瞭然たる諸天體の共有座なり、(吾人は此種の天は形體的天に攝せり)、此等の諸天體は強烈疑ふべからざるの活動を有せり、天體中の最も強大なる太陽の進行に依りて人生が始終支配せらるゝは確實なることにして社會的進歩の數多の段階に於て太陽は最上の拜禮物となるに至れり、然れども天體にして若し斯く浩大なる活動を有せんか、其の共有座なる天は勿論諸現體中の最勢力ある者ならざるべからずと。(支那文) (明概論)

太陽を拜禮の目的とする者の範圍は頗る廣かるべし、我邦人の間に在りても毎朝太陽を拜禮

する者甚だ多し、故に俗間或は太陽を指して直に天道と云ふ者あり、是れ拜日にして亦た拜天と謂ふべし。斯くの如く天は諸天體の共有座にして最尊最大の物體なり、然れども宇宙の主宰の神たるの觀念は可視的にして活動せる現體にあらずして、此より抽象せられたる不可視的神靈なりとす。

(ニ) 主宰的天の例證

以上イロハの三段に於いて略、主宰的意義を有する天の起原を論じたれば、此所には古來の正確にして著明なる數種の書に徴して其例證を示さんとす。尙書の舜典に徴するに左の語あり、曰く、肆類_{ツイニ}于上帝_ニと、類とは祭祀の名なり、是れ舜が既に堯の讓を受けて位を攝し、皇天の心に當りて其事を行ふとき遂に上帝に告ぐるなり。其の次に舜は又た禋_ツ于六宗_ニ、望_ツ于山川_ニ、徧_ツ于群神_ニと、禋も望も皆な祭祀の名なり、然れども上帝に類するは禋望よりは重大なりとす。是を以てするも天を以て最尊の禮拜物と爲し又た宇宙主宰の神と爲すを知るべし、換言すれば天に對して祭儀を執行するは之を神とするが故なり。

書經の大禹謨篇に曰く、皇天_{カヘリミ}眷_{シテ}命_{シテ}奄_ニ有四海_ヲ、爲_ル天下君_トと、是れ舜の臣たる益といふ人が

堯の聖徳ありて皇天に命ぜられて天下の君と爲りし事を擧げて舜をして勉めしむるの語なり。皇天と云うて命令する意志を有することを示せば主宰の意義あること明かなり、但だ大禹謨篇は擬古文として排せらるゝも益の言の如きは、古來革命の際に成れる詔勅等には屢々見る所なれば普ねく行はれしものと謂ふべし。又た同篇並に論語の堯曰篇に曰く、天之曆數在汝躬、四海困窮天祿永終と、曆數とは天道なり、天道が汝の身に在れば汝終に當に升りて天子と爲るべしと云ひ、而して次の句に於ては天の賞罰より戒を垂れたるものなり、又た天降之咎と云ひ惟徳動天と云ひ、號泣于旻天と云ふは皆な此主宰的天に屬するなり。

書經皋陶謨篇に曰く、天叙有典、又た曰く、天秩有禮、其外にも、又た曰く、天命有徳、又た曰く、天討有罪、又た曰く、天聰明、又た曰く、天明威と、此等の句は明かに主宰の天を見るべく、且つ天叙天秩の天は實に儒教の根幹たる倫常を叙秩せる天を言ふなり。是故に古今の書にも儒教の淵源は天なりと云ひ、特に前漢の董仲舒は道之太原出於天と明言して中庸の首章の天命性道教の大意を示せり。凡そ天命又は天討の句は、天子の廢立及び善惡に應酬する賞罰も天の爲す所たるを示すなり。又た天聰明自我民聰明、天明畏自我民明

威と云ふ、是れ天は民に因りて之に福を降し、民の歸する所の者は天も之に命ず、天は人君の行を視聽するに民を用ひて聰明を爲す、天明の畏るべきも亦た民を経由して其の威を成す、叛する所の者は天も之を討す、是れ天明の畏るべきの徴證なり、此點に於ても亦た天人合一の觀念を見るべきなり、尙ほ書經に於ては天の命令、賞罰、警戒、生生等の最上權を有し天地間を主宰するの意を示せる語甚だ多し、書經は特に莊重嚴肅なる文多ければ他經よりも主宰的天と言ふこと多し。同じく益稷篇に曰く、以昭受上帝天其申命用休と、又た曰く、勅天之命云々と、此等は命令賞罰の權を有する主宰的天なり、以上は尙書の虞書に見えたる天なりとす。尙書の夏書にも亦た天を言ふもの少からず。甘誓篇に曰く、天用勳絶其命、今予惟恭行天之罰と、胤征篇に曰く、先王克謹天戒と、又た曰く、假擾天紀と、又た曰く、今予以爾有衆、奉將天罰と、又た曰く、天吏逸德烈于猛火と云ふが如きは賞罰警戒の方面より主宰的天の意を示せるなり。

商書にも亦た之れあり。湯誓篇に曰く、天命殛之と、又た曰く、夏氏有罪、予畏上帝、爾尙輔予一人致天之罰と、仲虺之誥篇に曰く、嗚呼惟天生民と、又た曰く、惟天生聰明

天乃錫_ニ王_ニ勇智_ヲ、表_ニ正_ニ萬邦_ニと又た曰く茲_ニ率_ニ厥_ニ典_ニ、奉_ニ若_ニ天命_ニと、又た曰く、矯_ニ誣_ニ上天_ニと、
又た曰く、叙_ニ崇_ニ天道_ニ、永_ニ保_ニ天命_ニと此等は皆な主宰的天を示せるなり。

尙ほ書經には湯誥篇以下の諸篇にも惟_ニ皇上帝_ニと云ひ、敢_ニ昭告_ニ于_ニ上天_ニ天后_ニと云ひ、惟_ニ簡在_ニ上帝_ニ之心_ニと云ひ、惟_ニ上帝_ニ不_ニ常_ニと云ひ、克_ニ配_ニ上帝_ニと云へるが如きは直接に主宰の意義を有せる天にして其他にも國家の興亡に際し、或は鑑戒を垂るゝに際し、或は賞罰等の語より推して主宰的天と見るべきもの甚だ多けれども繁を憚りて之を省く。

詩經にも亦た天を言ふもの少からず、然れども之を書經に比すれば其數少きのみならず、莊重嚴肅なる誓誥中に見えたる天の如きは甚だ希なり、故に主宰的天の例證は書經を以て最も適當と爲せども、今序を以て詩經をも引證せん。衛風の君子偕老篇に曰く、胡_ニ然而_ニ天也_ニ、胡_ニ然而_ニ帝也_ニと、毛傳に之を解釋して曰く、之を尊ぶこと天の如く、審諦は帝の如しと。又た小雅にも亦た之れあり不_ニ弔_ニ昊天_ニ、不_ニ宜_ニ空_ニ我師_ニ(節南_ニ)と又た曰く、胡_ニ不_ニ相畏_ニ、不_ニ畏_ニ于_ニ天_ニ(雨無_ニ)と又た曰く、昊天_ニ疾威_ニ、敷_ニ于_ニ下土_ニ(小曼_ニ)と又た曰く、各_ニ敬_ニ爾儀_ニ、天命_ニ不_ニ又_ニ(小宛_ニ)と又た曰く、何_ニ辜_ニ于_ニ天_ニ、我罪_ニ伊何_ニ(小辨_ニ)と、毛傳に曰く、舜の怨慕、昊天に父母に號泣すと言へるは皆天の畏



るべく且つ信賴すべきを示したるなり、直に主宰を指示せざれども一種の神靈を思つて之れに對して號泣哀訴するなり。大雅の桑柔篇に曰く、天降_ニ喪亂_ニ、滅_ニ我立王_ニと、又た雲漢篇に曰く、昊天上帝則_ニ不_ニ我遺_ニ、胡_ニ不_ニ相畏_ニ、先祖_ニ于_ニ推_ニと、又た烝民篇に曰く、天生_ニ烝民_ニ、有_ニ物有_ニ則_ニ、民之秉_ニ彝_ニ好_ニ此懿德_ニと、此句は寧ろ生生作用より言へるものなれども、書經の天叙天秩の句と同じければ倫常の淵源の天なることを見るべし。

又た周頌に畏_ニ天之威_ニ、于_ニ時保_ニ之_ニ(我將_ニ)と又た曰く、敬_ニ之_ニ敬_ニ之_ニ天惟_ニ顯思_ニ、命_ニ不_ニ易_ニ哉_ニ(敬之_ニ)と商頌の玄鳥篇にも天命_ニ玄鳥_ニ降_ニ而生_ニ商_ニと云へる句あり、此等は間接に主宰的天を示せるものなり。

尙ほ古書中に就きて、主宰的天を言ふの最も明かなるは墨子に如くはなし。墨子は明かに天を以て其の宇宙觀の根柢、其政治教育の基礎、人間行爲の標準と爲せり。其の宇宙觀念は後に別に論ずべければ、今茲には先づ政教の基礎及び行爲の標準としての天を述べんと欲す。

墨子が天を言へるは天志上中下三篇と法儀篇とを以て主と爲し其他にも天を論ずるもの少からず。法儀篇に吾人の萬般の行爲の法則を示して、法則を父母に取るも猶ほ不可なる所あり、

何となれば天下に不仁なる父母多ければ父母を法則とするは不仁を法則とするに同じからん。師に就き學を爲して此れに法則を取るべきか、是れ又た學者に不仁者多ければ不可なり。君に法則を取るも亦た不可なりと云ひ、遂に斷定して曰く、父母と學と君との三者は以て治法と爲して然るべきなし、然れば則ち何を以て治法と爲して可なるか、故に曰く天を法とするに若くはなしと、且つ夫れ天は公平にして私なく、施すこと厚くして而かも徳とせず、其の明は久しくして而かも衰へず、故に聖王は之に法れりと論じて、遂に天に法りて兼愛交利を行ふべきことを示せり、此に由て之を觀れば天を以て吾人行爲の最要の標準と爲すことを知るべきなり。次に墨子が説示せる天と人との關係を示さん、墨子曰く、今天下は小大の國となく皆な天の邑なり、人は幼長貴賤となく皆な天の臣なりと、故に人は天を尊敬せざるべからずと、又た曰く夫れ天は林谷幽澗にも人なしと爲すべからず明かに必ず之を見る(天志上篇)と、是れ國土及び人類等は皆な天の物にして又た天は人類の行爲を監視するものなりとするなり、所謂天は下土を照臨するものなり、且又た天志中篇に天が民を愛するの厚を知るものありと云うて、天は萬物を造るもの即ち造物的大作用を爲し、又た人に對する賞罰の權を有することを明示せり。

墨子は兼愛交利説を主張して、吾人の行爲の善惡に應じて天は之に禍福を與ふることを明示して曰く、愛シ人利ス人者天必福シ之、惡シ人賊ス人者天必禍シ之(法儀篇)と、此説は墨子以外の書にも多く示す所にして特に書經の中に明示されたり、蓋し古今東西を通じて此の説を信ぜざる者なからん。

又た墨子は吾人の行爲の善惡の標準を示して謂へらく、其行を觀て天の意に順ふ之を善行と謂ひ、天の意に反する之を不善行と謂ひ、其言談を觀て天の意に順ふ之を善言談と謂ひ、天の意に反する之を不善なる言談と謂ひ、其刑政を觀て、天の意に順ふ之を善刑政と謂ひ、天の意に反する之を不善なる刑政と謂ふ。故に天志を置て以て法と爲し、天志を立てて以て儀と爲し、將に以て天下の王公大人卿大夫の仁と不仁とを量度せんとなす、之を譬ふるに猶ほ黑白を分つが如し。(天志中篇)

上述の如く墨子は天を以て最尊最貴最智最正なるものと爲し一切の命令權及び賞罰權を以て之に歸し、吾人の行爲の標準を天に取り、義を務め兼愛を行ひ以て天の賞を受け、富貴福祿を得て平穩隆昌なる社會を爲さんと欲するなり。墨子の書中には儒教に反對するが爲に往々にし

て極端なる説を爲す所あれども、天を論ずるの諸篇は最も穩當正確にして萬古不易の眞理を含めり。墨子の論天の諸説は古來東洋にて普遍なる思想を最も明瞭に説示し以て其の教學の根柢と爲したるものなり。抑も主宰的天は有神を説ける教に在りては之を假るもの多きを見る、故に有神教の經典に於て主宰の意義を有せる天は皆な此に攝すべきなり、天は實に能く神の如き作用を爲し、又た神の所在の世界たるに適し、總ての點に於て有神論に便宜を供するが故に神を立つるの宗教として天を假らざるものなし、否な天を假るに非ず、天を外にしては神の意を立證すべきものなければなり。神を立てざる宗教に在りても諸種の世界を立て天を假ることあり、佛教の如き主宰神を立てずと雖も、天を説くこと亦た多し。

更に考ふるに彼の主神を立て神靈を説く所の宗教と雖も別に所謂主神ありや否や。予は信ず吾人が上來論述したる主宰的天を一層精巧に一層幽遠に一層高尚に一層尊嚴に説きて一種の宗教と爲したることを。各種の宗教の主神の性質に不同あり、甚しきは同宗内の信者が各自主神に對して異種の解釋と信仰とを有することあるは、反て吾人が説く所に徴證を與ふる者にあらざるか。予は猶ほ一步を進めて吾人が説く所の主宰的天の外には耶蘇教の所謂獨一主神及び波

羅門教の所謂梵天の存せざることを斷言せんとす。故に予は耶蘇教の神「ゴッド」も波羅門教の梵天の如き世界に所有神を以て此の種類の人に攝するものなり。吾人は以上に於て既に主宰的天の意味を陳べ了りたれば、終に臨て天佑といふ語に就て一言を附せんと欲す。此天佑の佑の字は或は祐に作るも同一なり、佑の字は天より助くるもの又は神より助くるもの皆な同様なりとす。書經には上天孚_マ佑_ニ下民_一（湯誥）同じく皇天眷_ニ佑_有商_一（太甲上篇）惟天佑_ニ于一德_一（咸有）とありて、佑の字を用ひたり。而して易經には自_レ天祐_レ之吉无_レ不利_一（大有）と云ひ、易曰自_レ天祐_レ之吉无_レ不利_一、子曰祐者助也、天之所助者順也、人之所助者信也、履信思乎順、又以尙_レ賢也、是以自_レ天祐_レ之吉无_レ不利也（繫辭上傳）とありて祐の字を用ひたり。詩經には惟天其右_レ之（清廟我將篇）同じく昊天其子_レ之實右序_ニ有周_一（清廟時邁篇）とありて多く右の字を用ひたり、斯かれば祐祐右の三字は同一に用ひられたるも吾人は多くの場合に於て天佑の語を用ふ。吾人が此の天佑といふ語を聞て直に其の深意を解して何等怪疑する所なきは其の浸染すること悠遠なるのみならず、吾人は生れ來ると同時に之を信すべき素地を具有するが故なり。今實例を以て天佑の二字が用ひられたることを示さんか。我邦日清日露の二大戦役に當りて吾人は天佑を保全せる大

日本帝國云々との冒頭を以て書かれたる宣戰の詔勅を拜誦したり、此の天佑と云ふ語の意味は即ち主宰的天の佑たること明かなり、吾人は此詔勅を拜誦せしとき眞に天佑を受けつゝあることを信ぜしなり。其の兩戰爭中にも屢々天佑の語を用ひられたるは吾人の能く記憶する所にし、特に東郷元帥の戰捷報告に天佑の二字を用ひられて天皇の御稜威と天佑とに依りて此の大捷を博せりとの意を述べられたるは人の普く知る所なり、是れ即ち吾人が廣く主宰的天を信ずるが故なり。

第四節 運命の意義を有する天

運命の意義を以て言ふ所の天は無象にして無靈なる者なり。然れども此の運命てふ觀念の起り來るは以上三節に於て縷述したる種々の觀念より誘起派生したる結果に外ならず、最初より別に運命てふ意味を具備する天あるにはあらざるなり、請ふ左に之を討究せん。

上來説きたる意義の天は宇宙に於て最大最尊最靈なる者にして生々の妙用を爲し、命令の全權を有し吾人人類を支配する者なり。然れば凡そ人類の吉凶、禍福、夭壽、榮枯、盛衰、貧富、幸不幸等は悉皆天の權限内に在りと信ずるに至るは自然の勢なるべし。此の信仰は即ち漸次天

命、運命、宿命、命數、定命、命又は運てふ語にて發表せらるゝ者にして又た此等の代りに天といふ一字を以てすることあり、是れ今考究せんとする所の天なり。惟ふに吾人は自由意志ありて必しも一舉一動を運命に由りて支配せらるゝ者にあらざるも、亦た到底人力の及ぶべからざる事ある事變に遭遇するに至りては、止むを得ずして天を仰ぎて慟哭哀號することなきに非ず、故に吾人は決して絶對的に意志の自由を主張すること能はざるなり。然れども運命説も亦た極端に之を信すれば、一切の行動云爲を悉く之に委し、遂に怠惰放恣に流れて克己奮勵を非とするに至らん。是れ吾人が極端なる運命説を排斥する所以なり。是故に運命は容易に口にすべからず、人力を盡くして然後に天命を待つは實に止むことを得ざることなるべし。古來の哲學者にも宿命説を取りしものなしとせず、況や凡俗に於ては運命を口にする場合甚だ多し、特に東洋に於て佛教の流布して以來は因縁又は因果てふ語を用ひて不如意底の境遇を慰諭すると少からず、俗間にて「因縁づく」と諦める」と云ふは所謂宿命説を取る者と同じきものと見るべきなり。大凡此種の天は吾人が吉凶禍福夭壽等に於て非常に急激なる變動を蒙むり、不可抗力の災害を受けたるが如き時に叫び出ださるゝものなり。

吾人は此れより古來の經傳中に就きて此の運命的天の意義を考究せんと欲す。先づ古來聖賢先哲が人力を盡くして然後に天命を待ちたる例證を示さん。

(イ) 制限的宿命説

論語に子罕言利、與命與仁(子罕第九)とあり、此所に命と云ふは所謂運命なり。夫れ人の生死禍福夭壽窮通の理は窈冥にして知り難く、幽遠にして必し難し、人は唯だ宜しく人道の當に爲すべき所の者を盡くして而して黙して以て之を聽くべし、若し人に語るに命を以てするときは則ち人將に事毎に必を天に取り、怨むの心生ぜんとす、故に孔子は亦た罕に言へるのみ、蓋し人の自修奮勵して妄りに運命を口にするなからんことを欲するなり。此れに由りて之を觀れば孔子は命を取らざるにはあらず、眞に人力を盡くして然後に天命を待つ者なり。又た季康子問弟子孰爲好學、孔子對曰、有顔回者好學不幸短命死矣、今也則亡(先進第十一)とあり、此所に命と云ふは所謂年壽の意なり、而して年壽を命と云ふは元來人の年壽は全く天の命する所と云ふより來れるが故に長命短命と云ふ是れ亦た宿命説より言へる語に外ならず。凡そ人が老衰又は疾病より死するは之を命と云ひ、殺戮災難に依て死するを非命の死と云ふ、孔子が子路を謂つて

若由也不得其死然(先進第十一)と云へるは則ち非命の死を豫言したるなり、而して不幸にも此の豫言は適中して子路は衛の亂に遭うて非命の死を遂げたり。此等の例を見れば命と非命との區別は明かに知らるべくして孔子の命説は實に之れに外ならざるなり。子曰回也其庶乎屢空賜不_レ受_レ命而貨殖焉、億則屢中(先進第十一)と此の命は朱子の註釋にも天命なりと云へり、蓋し貧富は天に在り、而るを子貢は貨殖を以て心と爲すときは則ち是れ天命を安受すること能はざればなりと、道を修むる者が徒に利益に念を專にするを歎ぜられたるものならん。

子夏曰商聞之矣、死生有命、富貴在天(顔淵第十二)、商とは子夏の名なり。此の言は稍露骨に命を説きたれば教訓と爲すべからずとの評もある程なり、蓋し子夏が嘗て孔子に聞ける語にして司馬牛が兄弟なきを憂へしを慰諭せし時に發せしものなり。然れども徒らに死生と富貴とに心を動かして安んずる所なきは進修を妨ぐるること勿論なれば人に應じて斯かる言を爲すも亦た妨げざることあるも注意すべき事なり。公伯寮愬子路於季孫、子服景伯以告曰夫子固有心也、不可及、公伯寮其如命(憲問第十四)と、蓋し孔子は此言を以て景伯を曉し子路を安んじて伯寮を警しむる

なり。抑も道の將に行はれんとするか命なり、寮は固より之をして廢せしむること能はず、道の將に廢せんとするか命なり、其の實は、寮が能く廢する所に非るなり。孔子は終身其席も暖まらざる程に弘道布教に盡瘁して猶ほ此の言を爲す、誠に止むを得ざるものありしならん、是れ孔子が非常事變の際に處するの道なり、即ち所謂人力を盡して然後に天命を口にせらるゝものなり。

孟子も亦た孔子と同じく宿命説を爲せるも固より他の怠惰放恣を希ふの徒の宿命説とは全く異なれり。

孟子曰、苟爲善、後世子孫必有王者矣、君子創業垂統爲可繼也、若夫成功、則天也、君如彼何哉、彊爲善而已矣(梁惠王下篇)と、是れ孟子が滕文公を慰諭して善行を獎勵したるの語なり、勵精以て善を爲し其の成功と失敗とは豫め心を煩はすを要せず、成敗は則ち天に任せんといふなり、此言は最も能く運命の意義を有する天の適例なり。

梁惠王下篇の末に魯平公が孟子に會見せんとして嬖人臧倉てふ者に妨げられしときに、弟子樂正子が之を惜みしを聞いて孟子曰く、行或使_レ之止或_レ尼_レ之、行止非_レ人所_レ能也、吾之不_レ遇_レ

魯侯_レ天也、臧氏之子、焉能使_レ予不_レ遇哉と、是れは聖賢の出處は時運の盛衰に關す、乃ち天命の爲す所にして人力の及ぶべきに非ざるを言ふなり。斯かる場合に孟子が天命を叫ぶは稍輕卒に見ゆるが如きも決して然らざる事情の存せしものならん。孟子が道を弘め天下を平治するに熱心なる遂に此の言を發せしものなるべし。

史記の孔子世家に曰く、孔子既に衛に用ひらるゝを得ず將に西して趙簡子に見えんとし、河に至て竇鳴犢と舜華の死を聞き、河に臨みて歎じて曰く、美哉水洋洋乎、丘之不_レ濟_レ此命也夫と子貢趨り進て曰く、敢て問ふ何の謂ぞ、孔子曰く、竇鳴犢と舜華は晉の賢大夫なり、趙簡子未だ志を得ざるの時に此の兩人を須ちて而後に政に従ふ、其の已に志を得るに及て之を殺して乃ち政に従ふ、夫れ鳥獸も尙ほ不義を避くるを知る、而るを況や丘をやと乃ち還れりと。此所に命なるかなと曰へるは孟子が吾が魯侯に遇はざるは天なりと言へるに同じ、即ち異語同意にして運命的天なり。尙ほ孟子曰く、莫_レ之爲_レ而爲者天也、莫_レ之致_レ而至者命也(萬章上篇)と、又た曰く其子之賢不肖皆_レ天也、非_レ人之所_レ能爲也(同上)と此等の天は明かに宿命的意義の天なり。孟子は更に明瞭に運命的天を示して曰く、盡_レ其心_レ者知_レ其性_レ也、知_レ其性_レ則知_レ天矣、存_レ其心_レ養_レ

其性^ヲ所^ニ以^テ事^レ天^ニ也、夭壽不^レ貳[、]修^レ身^ヲ以^テ俟^レ之[、]所^ニ以^テ立^レ命^也、孟子曰莫^レ非^レ命^也、順受^ニ其^{正^ニ是故知^レ命者不^レ立^ニ乎巖牆之下[、]盡^ニ其道^ヲ而死者正命也、桎梏死者非^ニ正命^也（盡心^{上篇}）と、孟子の言は實に能く儒教の命説を説示せる者なり。}

以上は孔孟教に言ふ所の有限的宿命説即ち盡人力而後俟天命者なり。故に儒教は決して非命説にはあらず、然れども又た極端なる宿命説にはあらず、吾人は儒教を有限的若くは制限的即ち超人的宿命説と曰ふ。孔孟二子の常に云爲せし所は決して天命を口にして放恣安逸を希ひしには非ず、極力社會の爲に盡くして弘道に奔走して人力の到底及ばざる時に於て天命なりと絶叫して泰然たりしなり、故に自由意志説と極端宿命説との折衷説と云ふも不可なく、極て實際に適切なる運命説なり。世の意志自由を主張する者も實社會に活動する間には不如意の事多ければ到底頑然として自由を主唱することを得ず、是れ又た有限たらざるを得ざるなり。古往今來、東西南北、何人も生涯得意満足、自由自在の境に在る者は絶無なりと謂ふべきなり。孔子の遺書以外にも古今諸子史乘にも所謂制限的宿命説の證を與ふる者少からざれども逐一之を列擧するの要なからん。

(ロ) 極端なる宿命説

極端なる宿命説は怠惰放恣を誘起するものにして、決して教訓と爲すべからず。儒教の正しき制限的宿命説すらも往々にして誤解を蒙り、或は妄用せられて害を生ずることなきにあらず故に墨子は口を極めて儒教の徒を極端なる宿命論者の如く見て之を痛撃せり、是れ固より正鵠を失せる者なり。然れども世俗の輩が極端なる宿命を信じて社會を毒害するは古來頗る多し、墨子は非運命論者なれば其遺著にも非命篇ありて痛く運命論者を攻撃せり。蓋し墨子當時の宿命信者は謂へらく、命、富めば則ち富み、命、貧しければ則ち貧く、命、衆なれば則ち衆なり命、寡なれば則ち寡なり、命、治まれば則ち治まり、命、亂れば則ち亂る、命、壽なれば則ち壽なり、命、夭なれば則ち夭なり。又た謂へらく、上の賞する所は命固より且さに賞せんとす賢なるが故に賞するに非ざるなり、上の罰する所は、命固より且さに罰せんとす、暴なるが故に罰するに非ざるなりと、此くの如く宿命信者は貧富も、衆寡も、治亂も、夭壽も、賞罰も、悉く命にして人力は何等の効果なしと思惟せり。故に夏桀殷紂の如き暴君は命を口にしつゝ、遂に國を失ひ身を亡ぼすに至れり。墨子は兼愛儉勤を主義とするが故に非命上中下三篇に於て

無命を主唱し、有命の弊害を痛論せり。墨子は専ら人力を頼み、克己勉勵せざるべからずと説く者なれば、賞罰貧富等は皆な人力にて求むべきものとす、所謂意志自由論者の一種なり。荀子も亦た其の著、天論篇に於て宿命説を否定し、一世の治亂興廢等より一身の吉凶禍福貧富等は皆な自ら招くものにして天命にあらずと論ぜり、蓋し時代に前後の差あれども墨子と遠く相呼應して非命論者の雄なる者と稱すべし。荀子は孔門の系統を承くる儒者なれども、頗る大膽なる自由論者にして性に就きては孟子に反對して性惡説を主唱し、命説に就きては孔孟と趣を異にして斷然非運命説を立てたり。故に予は荀子を以て儒教の傍系に馳せたる者と云ふ、蓋し荀子の根本思想は既に孔孟と相同じからざる點を存すればなり。

又た列子の書には力命篇ありて人力と天命とを擬人的に問答せしめて之を論ぜり。其の要に謂ふ「力は命に謂つて曰く、汝の功は何んぞ我に若かんやと、命曰く、汝何んぞ物に功ありて吾に比せんと欲するか、力曰く、壽夭、窮達、貴賤、貧富は我力の能くする所なり、命曰く、彭祖の智は堯舜の上に出でずして壽八百歳なり、顔淵の才は衆人の下に出でずして壽二十八歳なり、仲尼の徳は諸侯の下に出でずして陳蔡に困む、殷紂の行は三仁の上に出でずして君位に

居り、季札は呉に於て爵なし、田恒は齊國を専有す、伯夷叔齊は首陽山に餓死し、季氏は展禽より富めり、若し是れ汝の力の能くする所ならば、奈何ぞ彼を壽して此を夭する、聖を窮し逆を達し、賢を賤して愚を貴し、善を貧して惡を富するか、命曰く、若し汝の言の如くならば、我固より物に功なし、然らば物が此の如くなるは則ち汝の制する所なりや、命曰く、既に之を命と謂ふ、奈何ぞ之を制する者あらんや、吾直くして之を推し、曲げて之に任ず、自壽、自天、自窮、自達、自貴、自賤、自富、自貧なり、吾豈に能く之を識らんや、吾豈に之を識らんや」と、是れ貧富貴賤等は人力の能くする所にあらず、命なりと云ふ、然れども命は致すことなくして至る者なるが故に、能く制することなし、唯だ自然にして而して然る者あるのみ。而して不知_レ所以_レ然_レ而然_レ者命也とは古今に通ずる所の命の定義なり。是れ即ち極端なる定命説にして墨子、荀子が痛く排斥せし所の説に同じ、後世の儒者には往々極端なる定命説を爲して人を誤る者あるが如し、戒めざるべからず。又た詩人には時々放恣的天運を言ふものあり、漢代の古詩にも此類の思想を叙し、晉の陶淵明が其の五男兒の紙筆を好まず、殆ど取るべきものなきを歎じて天運苟如_レ此且進_レ杯中物_一と言へるが如き是れなり。西洋古代哲學史上にも克己學派と

稱せられたる「ストア」派の如きは「天然に従うて生活せよ」てふ句を以て重要な教理とし、天理は常に萬物と俱に存して過去現在未來を貫通して無限に存在し、又た萬物は、悉く皆な此の通理に依て支配せらるゝのみならず、又た之に依りて豫定せらるゝ者なりと云ふ。此の思想は稍々儒教に類し又た宿命説と稱するを得るなり。

上來説きし所は主宰的天を絶対に崇敬信奉するの結果として運命説の生じたることを示せしも、茲に亦た顯著なる除外例あることを忘るべからず。何となれば深く主宰的天を信奉する者も運命説を取らざることある是れなり。即ち墨子の如きは其の適例なり。墨子は主宰的天を説くこと彼の如く熱心なりしも、絶對的に運命説を排撃せり。此の場合には主宰的天は恰も天子の如く、人類は恰も臣下の如く考ふべきなり、君主は賞罰の權を有すれども人民の一切の運命を左右することなし。墨子も實際主宰的天を天地間の君主として人類を臣下の如く説きたるものなり。

却説、以上に論述せしが如く、天は運命の意義を含有するに至れる後は深く吾人の腦裏に印象を留め、到底抜くべからざる者と爲れり、近來意志の自由を唱へて宿命を排斥する者ありと

雖も之を無限に主張すること能はず。吾人は一舉一動が一定の命數的法則に由りて支配せらるることを唱ふること能はざると同時に、人力は有限なることを否認すること能はず。故に極端なる自由意志説も極端なる宿命説をも取らず、吾人は盡人力然後俟天命といふの命説を以て最も穩當正確なるものと信する者なり。

第五節 理てふ意義を有する天

吾人は上節に於て無象にして無靈なる定命的天を述べたれば、此節には無象にして無靈なる理法的天を述べべし。此種の天は常に自然之法則或は原則、又は理法てふ語と同意義に用ひらるゝものなり、然れども古代には一般に思想單純なるが故に理法を言ふこと多からず、盛んに理を説くに至りしは所謂宋明性理學の勃興せし後に在り、故に宋明の學者は古代經傳中の語を解釋するにも性理學の説を應用することあり。今吾人が此種の天を論ずるも亦た之れに同じければ、特に宋明哲學者の解釋を採る者少からず。

蓋し人類思想の發達の順序より考ふれば理法的天は最も後に起り來るべきものならん。何となれば古代の人民は其の思想は至つて幼稚單純なるが故に奇怪なることをも妄信すること多

く、又た徒らに畏怖すること多ければ、寧ろ前四節に述べし所の天の意義を用ふることも屢なりしならん、故に未だ冷靜に宇宙の理法を考察するに至らず、其の後人智漸次發達して奇異幻怪なる事を信すること少く、漸く冷靜に事物の原理を考究するに至り、始て原則若しくは、理性等の深遠なる疑問も發して互に之を討究するものなり。斯かる順序は獨り禹域の人に限らず、東西兩洋の人民俱に然るものゝ如し。然れども此所に注意すべきことは天に就きての意義漸く増進して已に理法でふ意義に達するも餘他の意義即ち形體的天、主宰的天、若しくは宿命的天の意義全く廢せりと云ふべからざること是れなり。天の意義は以上に述べし如く一度既に定まれる以後は人智開化發達の程度に従うて小差こそあれ、今日も猶ほ皆な並び用ひらるゝを見るなり。今日の如く科學的研究の盛なる時代に在りても神祕は依然として其の怪力を逞しくするものなり、若し宇宙間に一の神祕の迹を遺すことなく、全然所謂科學力に降服すれば天は唯一の形體的天のみの意味と爲らん、而して今日世に存する或種の宗教の如きは大抵皆な滅亡するに至らん。然れども科學的研究は決して未だ斯かる大勢力を有せず、唯だ宇宙間極て狹隘なる部分のみの研究に成功して率ね失敗彷徨しつゝあるものゝ如し。故に神祕は何等辟易する所なく

神祕的宗教の如きも依然として信者を有して勢力を占めつゝあるを見る、蓋し神祕は世界と共に永久に其の迹を留むるならん。

却説上述の如くなれば吾人が天を説くには右に論じたる四種の意義を並び用ひて可ならん、否な之を用ひざる能はざるものあるなり。四種の意義は自然に含まるゝものなれば唯だ機會に應じて其の適當の意義を附して可なるのみ。古書中の天を解するにも今日吾人が新に用ふるにも皆な任意其の一を取るべきなり。

理法的天の例證

理を以て言へる天も亦た其例決して少からざるべし、然れども古今を通じて例證を擧げんとは到底力の及ばざる所なれば今は最も有力なる數條を掲げんとす。論語八佾篇に曰く、王孫賈問曰、與^レ其媚^ニ於^ニ奧^ニ寧媚^ニ於^ニ竈^ニ何謂^ニ也、子曰^ク不^レ然^レ獲^ニ罪^ニ於^ニ天^ニ無^レ所^レ禱^ム也と、宋の朱子は此天を解して天即理也と注すれども恐らくは孔子の本旨に非ざるべし。何となれば此の場合には王孫賈の言を憤るの餘に出でし語なれば最も尊嚴なる主宰的天を擧げて之を警め且つ之を畏れしむればなり、故に朱注は取るべからざるなり。若し此天を理と解せんか獲^ニ罪^ニ於^ニ天^ニと云ひ、無^レ

所_レ禱也と云へる句は適合せざるものならん、斯かる注解は所謂牽強附會して理學的に説きたるものなり。

又た同じく公冶長篇に子貢曰、夫子之文章可_レ得_レ而聞_レ也、夫子之言_レ性與_レ天道_レ不可_レ得_レ而聞_レ也とある天道は理法を指せるなり。

朱子曰く、性は人の受くる所の天理なり、天道は天理自然の本體、其實は一理なりと、此注は立言の素旨を得たり、何となれば、孔子は常に實踐的方面に重きを置き人性及び天地自然の道、即ち原則を語ることを希なるを以てなり。

孟子の梁惠王下篇に云ふ、以_レ大事_レ小者樂_レ天者也、以_レ小事_レ大者畏_レ天者也、樂_レ天者保_レ天下、畏_レ天者保_レ其國と、朱子の注に曰く、天とは理而已矣と。此注解は恐くは非ならん、蓋し孟子は主宰の意義を以て言へるなり、何となれば樂むと云ひ、畏るゝと云ふは理に對するの言に非ず、樂天とは是れ上天の命に服して之に安んじ樂むものなり、畏天とは所謂天の威靈を畏敬するなり。尙書には此例の天特に多し、後漢の趙岐は孟子の此の天を解して聖人は樂て天道を行ふと云うて理法の義を附し、畏天を解しては主宰の義を附して知者_レは時を量り、天を畏ると

云ひ、天の威を畏るの例を引用せり、是れ固より従ふべからざる解釋なり。何となれば唯だ一所に於て二様の意味を附すればなり。

孟子の盡心上篇に云ふ、盡_レ其心_レ者知_レ其性_レ也、知_レ其性_レ則知_レ天矣と、朱子の注に曰く、天は又た理の從て以て出づる所の者なりと此解蓋し穩當ならん、何となれば人性と自然之法則とは元來同一なればなり、中庸の首章に天命之謂_レ性とあるは即ち此の意に外ならず、故に孟子の語は心性天の三者に就きて近きより遠きに進むべきことを示せるなり。

孟子の離婁上篇に云く、孟子曰く、天下有_レ道小徳_レ大徳_レ小賢_レ大賢_レ天下無_レ道小役_レ大弱_レ強_レ斯_レ二者天也、順_レ天者存_レ逆_レ天者亡_レと、朱子注に曰く、有道の人は皆な徳を修めて位は必ず其徳の大小に稱ふ、天下無道なれば、人は徳を修めざれば則ち但だ力を以て相役するのみ、天とは理勢之當然なりと、此解蓋し當を得たり、是れ所謂理法的天なり。中庸及び孟子離婁上篇に誠者_レ天之道也、思_レ誠者_レ人之道也と云へる天は最も適切なる理法的天の例證なり。又た史記の伯夷傳の天道是耶非耶の一句は理法若くは理勢の如く解する者あれども恐くは非ならん。何となれば同傳中に天之報_レ施_レ善人_レ其何如哉と云ひ、又た同傳中の或曰_レ天道無_レ親、常與_レ善人_レ

(此語は老子第七十九章に見ゆ)と云へるより考察するに尙書に所謂欽_ニ崇_テ天道_ヲ永保_ニ天命_ヲ之_ト話_トと云ひ、上帝不_レ常_、作_レ善_ヲ降_ニ之_ヲ百祥_、作_レ不善_ヲ降_ニ之_ヲ百殃_、(伊訓、又た墨子非樂篇)と云へると同意にして主宰的天なり。蓋し太史公は伯夷に代りて主宰的天の賞罰其當を得ざるを訴へしものなり故に此語中の天道は之を理法的天に攝すべからず。

以上に掲げし例證に據れば、此理法的天は稍々高尚なるものなれば、實踐的方面に重を置きし孔孟二子は多く語らず、孔子よりも孟子が卻て多く用ひられたるの迹あるは是れ孟子は稍々理想的にして理論的傾向ありたればなり。且つ宋明の儒者は最も精緻なる討究を爲し、宇宙の原則を説くこと多けれども、宋明時代と爲りては既に理といふ新術語を以て明かに其の意義を顯はし復た天の字を用ふるの要なかりしなり。故に程朱諸子が古經の語を解釋するには天を理と解すること多けれども、自家の思想を言ひ顯はすには理の代りに天を用ふること極て希なり。然れども理の字を以て到底充分に自家の思想を言ひ盡くさざることあり、例せば程明道が上天之載_ト。無_レ聲_{無_レ臭_、其體_{則_レ謂_ニ之_ヲ易_ト、其理_{則_レ謂_ニ之_ヲ道_ト、其用_{則_レ謂_ニ之_ヲ神_ト、其命_{于_レ人_、則_レ謂_ニ之_ヲ性_ト、率_{性_{則_レ謂_ニ之_ヲ道_ト、修_レ道_{則_レ謂_ニ之_ヲ教_ト}}と云ふが如き場合には上天と理とは非常の差異ありて理}}}}}}

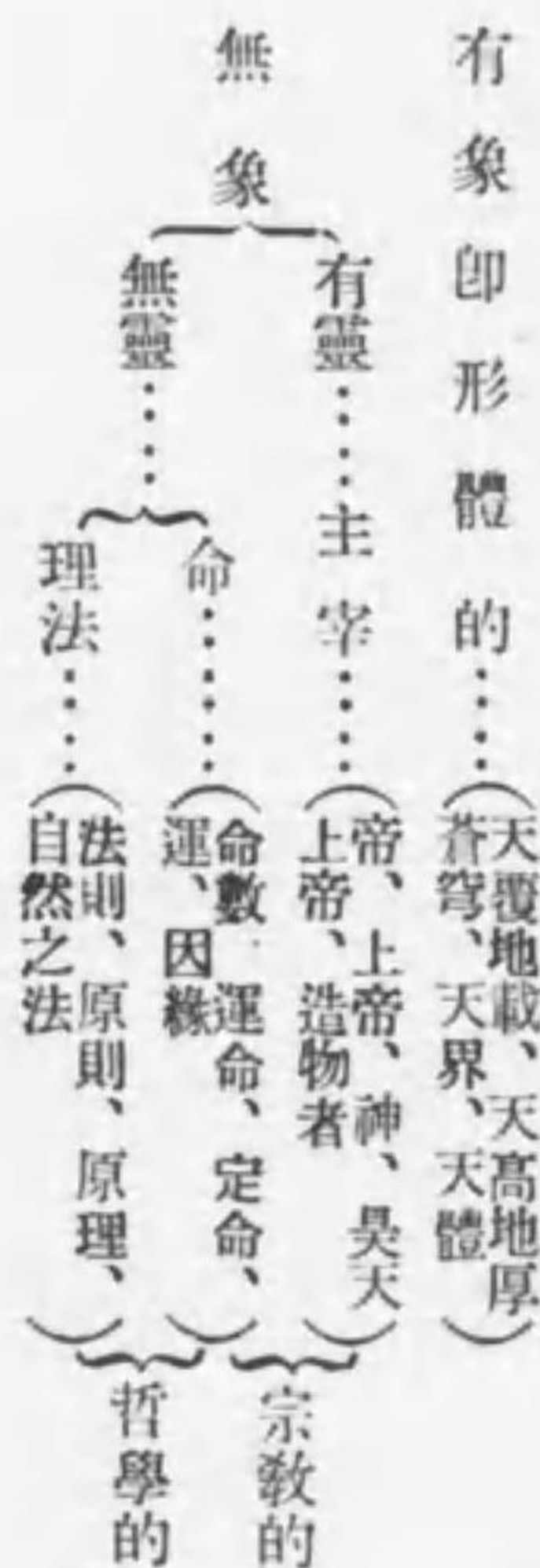
以て天に代用すること能はざるなり。尙ほ斯かる例は宋明學者の遺書中に多し。

以上の五節を累ねて論述せし天の意義は獨り支那古來の書中に於て見るのみならず、東洋に於ては現今も尙ほ普ねく活用しつゝあるものなれば機に觸れて其意義を考察せんことは極て興味あることなるべし。特に哲學、倫理、宗教を攻究せんと欲する者は須らく先づ之を討究すべきなり。

再言すれば吾人が上來述べし所は主として天の四種の意義の起り來る順序を時代的に論示したれども、此四種の意義は今日の世界に於て行はるゝものなれば、吾人が之を活用するにも其時と場合とに因りて單に形體的天を用ふる時もあり、又た嚴肅莊重なる場合に於て主宰的天を用ふる時もあり、萬事窮して策の出づる所を知らずして運命的天を叫ぶこともあり、又た萬物の理法を研究して冷靜に理法的天を用ふることあり。

終に臨て吾人は上來論述せし所の四種の天を略圖を以て概括的に之を示さんと欲す。予は上述の四種の天あることを確信する者なり。且つ予は東洋古今の思想を根柢的に了解せんとする者は先づ此四種の天を熟知せざるべからず。特に我が邦の神道及び上代の歴史即ち神

代卷を了解せんとするには必然此の天の意義を審知すべきものなり、換言すれば廣意義に於ける宇宙論を了解するには先づ天の意義を知るを以て最要と爲すものなり。



第三章 宇宙の主宰たる太一神の論

吾人が宇宙を論ずるに當りては種々なる方面より之が歩を進むることを要す。吾人は既に二章に於て天の四種の意義を論究したれば此章に於て、其の主宰的天を以て宇宙の大上大尊太一神と名くるの説を示さんと欲す。

太一神又之を太乙神と書することあるも全く同一なり。古來太一神に就て述べたる者なきに

非ざれども最も詳細に説示したるものは我が藤樹先生に如くはなし。先生が太乙神祭祀の念も亦た報本反始の孝の念より起れり、先生は總べての事を孝より考へられたることは此祭祀に就ても知るべきなり。報本反始とは元と禮記の郊特牲篇に出づ、本に報い始に反へる、即ち根本に立ち返へりて謝禮すること、穀物の熟したる時には先づ后土(土神)に供へて祭るの類をいふ。今は廣く造物主が萬物を生ずるの洪恩に報ゆるの意にて報本反始と云ふ、我を生みて之を育てし父母の恩を報ずるの意に同じ。先生謂へらく太一神は宇宙主宰の神にして最尊最高なるのみならず、全知全能にして能く宇宙の萬物を創造し亦た能く人類萬物を支配し、一切の權を有するものなり、此の太一神は萬古に亙りて不生不滅にして生生造化の作用は一瞬間も息むと
きなく、亦た其の作用は宇宙一切の處に普ねく及ぶものなり。斯かれば或る耶蘇教の牧師は藤樹の説を見て此の太一神は全然耶蘇教に説く所の神即ち「ゴツド」に同じきが如しと謂へりと眞に然らんか。耶蘇教に所謂「ゴツド」は即ち太一神なりと説くべきものならん、唯だ其の説く所に小差ありとするも、其の小差は信者の記する所が種々なる事情に影響されて起り來れるのみ。換言すれば國土人情風俗及び人智進歩の程度等に因りて「ゴツド」と太一神とが小差あ

るが如く見ゆるのみならん、何となれば宇宙間に主宰の神ありとせば其主宰の神は唯一なるべければなり、唯一なる主宰の神を色々なる方面より見て其の了解し得たる状況を記したるのみなり。耶蘇信教が「ゴツド」を考ふるも千人千様なるべきも唯だ一神教を主張せんが爲に信者の所見を自由に發表せしめず強制的に同一神として信奉せしむるのみ、故に吾人は或る牧師が太一神と「ゴツド」との同一なるが如しと謂へるを以て正當の見と爲すものなり。若し兩者が全然異なりとせんか、宇宙間に主宰神の一ならずして多種となるべければなり。或は兩者が唯だ類似せりと云ふも亦た主宰神が一にして止まらざるを示すものなり。左に藤樹先生の作れる太上大尊太一神經序の説を摘録して太一神の概要を示さん。曰く、太一尊神とは尙書に所謂皇上帝なり、夫れ皇上帝なる者は太一の神靈、天地萬物の君親なり、而して六合微塵千古瞬息も照臨せざる所なし、蓋し天地各々ニ徳を乗りて而して上帝の備はれるに及ばず。日月は各々時を以て明かにして而かも上帝の恒なるに及ばず、晦あり而かも明は虧けず、天地は終りありて而かも壽は竟はらず、之を推して其の起りを見ず、之を引て其の極りを知らず、之を息めて其の機を減さず、之を發して其の迹を留めず、一物も知らざるなく、一事も能くせざるなし。

其の體は太虚に充塞して而かも無聲無臭なり、其の妙用は太虚に流行して而かも至神至靈なる無載に到り無破に入る、其の尊貴は獨にして對なく、其の徳は妙にして測られず。其の本とは名號なし、聖人強ひて之を字して太上大尊太一神と號すと。以上に掲げたる藤樹先生の文に徴すれば、太一神は宇宙間に至神至靈なるものにして何と名くべきことも爲し得べからざれども古代聖人は強て假りに名を附けて太一神と云へるのみなりとす。是れ恰も老子が道を以て宇宙の本源と爲したるも元來宇宙の本體は一定の名を附すべきものに非ざれども強ひて假りに名けて道と云ふと謂へるに似たり。却説、古代の聖人は宇宙の主宰の神を太一神と命名して人をして主宰神の萬物を生生したるの本を思ひ、其の造化の大神に報いしめんが爲に祭祀を行ふことを得しめられたり。凡そ造化の大神を報いんとするは總ての生物特に動物に生來するものなることを豺獮を以て例示せり、況や萬物の靈長たる人類は固より天性に順へば生生の洪恩を報ずるの念を抱くものなれば、聖人は人をして報本反始の爲に太一神を祭らしめ給へり。案ずるに支那に於ては郊といふ祭と類といふ祭は唯だ天子のみが舉行するものにして何人も普ねく行ふべき祭祀に非ず、社といふ祭と宜といふ祭は何人も行ひ得る祭なれば、此の社宜の祭に倣ふて

太一神を祀らしむ。郊と類とは祭天に屬する祭にして社と宜とは祭地に屬する祭なれば、天を父とし地を母とするより考ふれば天は尊くして親まず、地は親しくして尊からざるなり、然れば太一神を祀るには僭越の罪を犯さざる方法を設けて之を執行せしめられたり。藤樹先生の説に曰く「聖人は人をして其の生養の本を知りて敬して以て太一神に事へしむ。夫れ以みれば豺獮は形は偏氣を受くと雖も一點の靈明は猶ほ昧からずして獸を祭り魚を祭る、而るを況や人は萬物の靈貴なるをや、是を以て先聖は報本の禮を修めて以て天下後世に教ふ。按ずるに郊と類とは天子の獨りする所なり、社と宜とは天子より以下皆な之を行ふを得べきなり、天は猶ほ父の如し、尊くして親まず、地は猶ほ母の如し、親しくして尊からざるが故なり。郊と類とを行ふを得ずと雖も而かも至れる哉、乾元萬物資て始むと、則ち齋戒して本に報ゆるの事なかるべからず、故に先聖は太一尊像を作り、以て齋戒の本主と爲し、毎月聖降の日を擇び、以て齋戒の期と爲し、祭文を定著し以て洗心事天感通の本主と爲す、而して人々が報本の意を遂げて郊と類との儀に僭せざることを得しむ」と。

以上に示せる藤樹先生の文は主として聖人が人をして太一神を祭りて造化の本に報い、生育

の始に反へすの誠を盡さしむるを云へり。祭を行ふには直ちに在天の神を拜するも、神像を設けざるものあり、耶穌教徒等が唯一神を天に在ますものとし仰て之を尊敬禮拜するも別に偶像を作らず是れ亦た一種の方法なれども、又た禮拜の對象とし本主として神の像を假作して之に對して敬を爲すも亦た確かに一方法なるべし。偶像以外に神なしとするは固より不可なれども偶像を介して眞神を敬するは却つて漫然として蒼々渺漠たる天に向つて拜するよりも便利なることあり。例せば遠方に在る某人を敬し之を慕ふ時に空漠に之を敬慕せんよりは其の寫眞又は肖像畫を假ること却つて便利なるが如く、神を禮拜するときにも此の意味に於て偶像を假用するの却つて無きに勝れることあるを見るなり。故に太一神を祭るには祭祀の禮儀を定め、又た靈像を作りて之を祭禮の對象と爲さしむ、更に考ふるに偶像を設くるの一方便たることは固より明瞭にして唯低級なる人に對して案出したるのみなり。曾て聞く眞宗の親鸞の如く彌陀一佛を信奉し、偶像又は畫像又は名號を掲げしめて之に對して拜せしむる者も猶ほ偶像よりは畫像を、畫像よりは名號をと、漸次進で内部に向はんとするの傾向を示せり。然れども名號を掲ぐることをも止めて、彌陀佛は各自の心内に在りとは示さず、是れ亦た一方便説なり。小乗佛教

に在りては多く信者の低級なる者を導くに心を用ひたれば偶像を假用したるも、大乘佛教に至りては必しも心外に佛を説かず、直指人心見性成佛と悟るを以て要旨と爲す。然れば、自己以外に偶像を作くるの要なし。然れども世の中の人は機根千差萬別なれば、一概に偶像を廢して直に大乘的開導を適用すべからざるものあり。嘗て熊澤蕃山先生が詠める歌に「みな人のまゐる社に神はなし、心のそこに神やまします」とあり、又た中江藤樹先生が蕃山先生に答へたる歌に「みな人のまゐる社は月なれや、こゝろのすまば神や宿らん」とあり、神佛を自己以外に拜するは初步の人の事にて高等に進める人には偶像は無用ならん。然れども世には盲目千人目明千人といふことありて信仰者の程度に應ずるには一概に偶像を廢すべきにあらず、唯だ臨機應變、應病與藥と知るべきのみ。而して太一神祭禮の制作は古代聖人に始まりたらんも、禮書に記載せざれば今日に明知すべからざるも、靈像の主として易象を以て之を作りたれば、太古伏羲に始まり文王周公を経て孔子に至て大成したるものならんといふ。藤樹先生の説に曰く、「至れる哉制作、仁なる哉聖謨。制作の聖は未だ其名を聞かずと雖も而かも靈像は一に易象を以て體要と爲せば則ち伏羲に始まり、文王周公に中して孔子に成れるは推して知るべきなり。

社の禮は禮の書に載せて粲然として後世に明かなり。靈像の祭禮は禮の書に載せざるを以ての故に後世に明かならず」と。

藤樹先生は太一神を宇宙主宰神として尊敬し、其の萬物生育の鴻恩に報いんが爲に、所謂報本反始の意味に於て祭祀を行ひ、其の禮拜の本主即ち對象として太一神の靈像を安置すべきことを説けども、決して迷信的に之を信奉する者にあらず、但し凡て信仰には迷信奇蹟の伴生し易きものなれば、藤樹先生は深く此に意を致して明かに之を辨ぜられたり。太一神に就きて怪異なる傳説あることは既に前漢の劉氏の時に見えたり。漢の時に天は鬼神をして劉氏に、秘説を授けしめたりと云ふ、其の神授は鎮宅靈符と名けられて後世に傳はりて祈福除難の神として信仰せらる。今日に於ても其の一例は鎮宅靈符神は京師上京鞍馬口の閑臥庵にも安置せられ、浪華にも鎮宅靈符の信者往々にして存せりと云ふ。今日の支那に於ても信仰者あるならんと思はるゝなり。然れども鎮宅と命名するより考ふるも宅を鎮する守護神として信奉するのみにして宇宙主宰の神にあらず、鎮宅靈符は別に藤樹先生の説明あれば後に之を掲ぐべし。且つ太一神は既に湮滅して千有餘年に及びたり。猶又古來儒者は太一神を神仙術數に付して精察せざ

るは悲しむべきことなりといふ。太一神は神仙術數にあらず、唯だ鎮宅の一事を主とする神にもあらず、先生の説に曰く、漢に至りて天は鬼神をして之を劉氏に授けしめしよりして後世に傳ふ、然れども鎮宅と爲して之を降す、故に唯だ鎮宅靈符と號して世俗は其の眞を知らず、是を以て太一神經は湮晦すること此に千有餘年なり、儒者は之を神仙術數に付して察せず悲しい哉。靈像の奉祀は本と報本の禮を主として福を祈ることは其の中に在り、凡て祭禮は皆な然り嘗て之を考ふるに靈像の神は天地萬物を造化し、禍福を主宰し、太虚萬微に充て知らざる所なく、能くせざる所なし、豈に唯だ鎮宅の一事のみならんや、と。

世人は唯だ鎮宅靈符神あるを知りて太一神あるを知らず、又た周末に在りて屈原の離騷經の中にも九歌に東皇太一を祭ることを叙せり。前漢の頃より太一神を祭ること漸く盛にして朝廷の大儀の一と爲れり、但し其の祭儀は時に因りて輕重同じからず、又た種々なる迷信的神名を附加して其の眞意を失ふに至りたれば、遂に神仙術數の徒に乗ぜられ貪利釣名の具に供せられたり、故に儒者は太一神祭を見て神仙家の僞祭の如く論ずる者出でたり、是れ則ち迷信の爲に誤られたるものに過ぎず。藤樹先生が祭らんとする太一神は天地の成毀を以てして成毀せず、

軀殼の存亡を以てして存亡せず、宇宙主宰の神なれば、唯だ誠敬を以て之に事へ報本反始の意を明かにせんが爲に之を祭り又た靈像を安置して禮拜の對象と爲すのみ。故に儒者の先務と爲すべき所なりと云ふなり。然れども太一神經既に傳はらず、加之、神仙家迷信の爲に汚がされたれば、儒者の排斥する所と爲りて其の眞を發見するに苦まれしが、先生が唐氏の禮元剩語を讀て豁然として太一神像の眞を悟り祭儀を考定して眞神を祭らんとするに至れり。藤樹先生は儒者として其の本分を盡くさんが爲に太一神を祭らんと欲し、古來千有餘年間湮滅せし太一神經補作を企圖し、信仰的に宗教的に信奉して報本反始の誠を盡さんとしたることは恰も山崎闇齋先生が儒者として朱子學信奉者なるのみならず、伊勢流の神道に入り日本の歴史の神代卷、中臣祓等を考究して遂に垂加神道を立て日本神道を経由して、宇宙間の主宰神即ち天御中主神を始として天神七代地神五代八百萬神を信奉するに至れると略相似たり。藤樹闇齋二先生は儒者の中にも熾烈なる敬神家にして進て宗教家と爲らるゝ者なり。若し藤樹先生をして六七十歳までの長壽を保たしめば、恐らくは宗教的方面にも見るべきものありしならん、然れども僅に四十一歳にして卒せられたれば闇齋が垂加神道を成して神道中興の業を立つるが如きに至ら

ざりしなり。藤樹先生の辨明の文に曰く「誠敬以て能く之に事へて尊神感格せば則ち所謂天地と其の徳を合はせ、日月と其の明を合はせ、四時と其の序を合はせ、鬼神と其の吉凶を合はせ、天に先ちて天は違はず、天に後れて天時を奉ずる者なり、太和を保合す、乃ち貞に利なり。是を以て天地の成毀を以てして成毀せず、軀殼の存亡を以てして存亡せず、是を以て禍を避け福を求むることは以て道ふに足らざるなり。實に儒者の先務にして初學の由て以て持敬を資くる所なり、愚嘗て靈像を拜して以て易神の尊像にして儒者の敬事する所の者と爲すなり。然るに宋儒は符章を排斥して而かも他の左驗なし、是を以て疑うて而かも決する能はざること此に三年なり。今や唐氏の禮元剩語（明の唐一庵も亦陽明學者なり）を讀で豁然として證を得て、靈像の眞を悟りて喜て寐ねられず命なる哉。是に於て衆説を會して其衷を折て、祭禮の儀節を斟酌して編を爲し名けて太一神經と曰ふ、同志と與もに篤く行うて庶幾くは尊神の左右を離れずと云爾、寛永十七年八月十三日江西中江原序す。」（以上全文）

以上に掲げし所の文は藤樹先生が宇宙の最上最大の主宰神として太一神を尊奉し之を祭りて報本反始の誠を盡さんと欲し、太一神經を作るの主意を序したるものなり、太一神經は先生病

氣の故を以て作るに至らず唯だ序文のみ今日に傳はれり、是れ即ち先生が宇宙觀を示し又た稍々宗教的に傾き、尊信の餘り之を祭らんと欲し祭らんが爲に禮拜の目的として靈像を假設したる者なることを示せるなり。哲學と宗教との連絡融和の點を見るべく又た以て先生が生來信仰的傾向を有したりしかを見るべし。太一神の靈像の祭儀等には古來迷信も多く伴ひたれば、先生は特に靈符疑解といふ一篇を作りて詳細に之を辨明し俗間の迷信を排して正旨を發揮された。宇宙論を主とする吾人の態度には迷信を容れざるは勿論、祭祀の儀式等を論ずるを好まざれども宇宙の主宰の洪恩を思ひ之が報本の誠を盡すことは決して輕視すべからざる所なり。然れば稍々繁冗に似たれども左に先生の靈符疑解を摘録して充分に、先生が太一神を祭るの本旨を明かにし又以て迷信に陥らざることを示さんと欲す。

一、靈符法章は易より來れる事を論ず

靈符疑解に曰く、或人問ふ、靈符を以て易神の尊像にして儒者の敬事する所の者と爲して又た曰ふ、其の法章は伏羲に始まり、文王周公に中して孔子に成ると、其れ何の考據する所ありて爾か云ふや。曰く、七十二道の符は即ち易の六十四卦なり正中の一箇の規は先天の圖なり、

其上は後天卦圖なり、規の中の神象は易に太極あるの象なり、悉く是れ易の卦の法象にして一毫の錯雜なくして至理至教悉く備はり、筮占と用を同うす、四聖之易象皆な具はりて欠闕なし故に左驗なしと雖も伏羲に始り、文王周公に中して孔子に成れるは靈像を觀れば則ち昭々として疑ふべからざる者あり、然れば則ち易神の靈像たることも亦た疑ふべき者なし。蓋し儒者の道は易を以て本主と爲し、四書六經に説く所と諸儒發明の語録とは廣しと雖も皆な易理に本づく、一毫も差あれば則ち異端なり、此れを以て儒者の敬事する所の者なることを知るべきなり。

二、太一神の靈像の本旨を論ず

或人問ふ、靈像の本旨は得て而して聞くべきか。曰く、言ひ難し。靈像全體は以て太虚に象どる、正中の一規は則ち太虚の皇上帝にして靈像の本主なり。規の中の神像は即ち太乙尊神なり、易に所謂帝と太極と是れなり、左は即ち示卦童子なり、即ち易に所謂陽儀にして爻の九、太極圖の陽動是れなり、右は即ち抱卦童子なり、易に所謂陰儀にして爻の六、太極圖の陰靜是れなり、統べて之を中皇上帝と謂ふ、左は陽神にして右は陰鬼なり、太虚中に別物なし、只だ是れ皇上帝と鬼と神との三靈のみなり。規は先天圖にして太虚に象る、其中の三神象は太虚中

の三靈なる者なり。太乙尊神は龜蛇を踐む者なり、龜蛇は北方玄武の神象なり、故に尊神が南面の意を示して青龍、朱雀、白虎、勾陳の諸神は皆な尊神の使令する所なるを明かにするなり。上の後天圖なる者は先天に由りて天地の象を生じて天地に象どる。故に七星を圖して天の樞を示すも亦た南面の意なり。七十二符を以て圍繞する者は以て千變萬化皆な易符神明の經綸する所にして尊神の妙用なるを明かにするなり、變化を符章と爲す者は其の用を明にするなり、八卦再變して七十二道と爲る者は陰陽を再變するの象なり。七十二とは一歳七十二候、一氣七十二日の數なり、此れ其の粗略のみ、章編三絶を待ちて其の數を開悟すべし、異端は此れを知らずして妄りに怪誕の名號を爲して其の道の主宰と爲す者は笑ふべし。

三、偶像假作の理由を論ず

或人問ふ、詩に曰く、上天之載無聲無臭。と中庸に曰く、鬼神之爲德其盛乎、視之而不見、聽之而不聞、體物而不遺と、此くの如くなれば則ち上帝鬼神は形色なかるべし、而るに其の形を圖畫する者は迂誕ならずやと、曰く、上帝鬼神は本と形色の言ふべきなし、形色なきを以てして神妙測られず、萬變に通じ萬化に主として昭々靈々たり。是を以て聖賢は畏敬して

違はず、書に曰く願^レ誤天之明命と、此れ乃ち明德を以て昭かに無形の神を視せしむる者なり、昧者は無形の神を視ること能はず、猶ほ替者の有形の尊者を視る能はざるが如し、既に之を視る能はざれば則ち之に教て畏敬せしむと雖も而かも篤く信じて敬すること能はず、是を以て聖人は已むを得ずして靈像を作爲して心目の間に瞭然たらしめて畏敬する所ありて常々奉行せしむ、工夫熟すれば則ち其の術に倚るを見るなり、其の前に參なるを見るなり、而して間斷なし一旦豁然開悟すれば則ち明德を以て無形の神を視ること猶ほ替者の昭明にして有形の尊者を見るが如し、有形の假象に依りて無形の眞體を見得せば則ち假眞一致して其の別を見ず、是れ乃ち中人以下の昧者の爲にして制作する所なり、經書も亦た猶ほ替者の相の如し、何を以て其の誣を疑はんやと。

四、偶像は何故に人の形を假用するか

或人曰く、人の形を假りて之を圖畫する者は何ぞや。曰く、禮に曰く、人は天地の徳にして鬼神の會なりと、書に曰く、人は萬物の靈なりと、人を假りて神像と爲さずして又た何をか假らんや、異端は此の意を竊みて人を假りて佛像を爲る者なり、然りと雖も似て而して非なる者

なり。

五、靈像と符章との用途の正邪

或人問ふ、顔氏家訓に曰く、吾家の巫覡符章は言議に絶す、汝曹が見る所、妖妄を爲す勿れと、朱子は小學に之を用ひて之を嘉言篇に編む、靈像は符章の類に非ざるか。曰く、異端曲學權謀術數も悉く皆な吾儒より出でざるはなし。吾儒に出づと雖も其の正を失ひ其の眞に迷ふ故に或は異端と爲り、或は曲學と爲り、或は權謀と爲り或は術數と爲る、而して其の非を斥け、其の失を正す者なり、故に異端曲學權謀術數の言と雖も我を以て彼を用ひば則ち猶ほ益あり、所謂人を以て言を廢せざるの意なり、況んや本と吾儒の言にして一旦彼れ之を竊て己が有と爲す者をや、小學に顔氏家訓を引用するの主意は只だ時俗の符章を尙びて是非の在る所を擇ばざるを矯むるのみ、蓋し宋儒は鬼神の事に於て體認すること熟せず、但だ時俗の弊を矯めんと欲して徒らに口を以て辨を取る、而るに明儒は其の非を悟りて其の失を辨す、大に後學に裨あり故に予も宋儒に従はずして明儒に従へり、此の靈像全體易象の如きは則ち亦た奚んぞ疑はんや。先天圖の如きは邵子以前には方士の手に在りて我の儒用を爲さざること觀るべし。

六、靈像を禮拜するは報本の爲なり

或人問ふ、靈像は一に福を祈り禍を避くるの術なり、全く是れ皆な易象と爲すと雖も、恐らくは身を修め命を俟ちて功利を計らざるの義に非すと。曰く、靈像を以て福を祈り禍を避くるの術と爲す者は後世の傳者の誤のみ、靈像奉行の本旨は報本を以て主と爲し、受福は之に従ふ祭禮も皆な然るなり、亦た奚んぞ疑はん。譬へば孝は本と親に報ゆるの行なり、何ぞ靈感を求めんや、然れども孝心に誠あれば則ち古今靈應は歴々として見るべし。凡そ祭祀の受福は斯くの如きのみ。故に曰く、淫祀に福なし、身を修め命を俟つ者は身を修むるの道にして天の命を俟つ者なり。靈像奉行報本の禮は修身の急務なり、心を報本に一にして他の求めなきは則ち所謂命を俟つ者なり、然れば則ち何の功利を計ることか之れあらん。陋儒は宋儒の註解に泥みて曰く、一に功利を計らず、鬼神に詔はずと、其旨趣は禪學に異ならず、儒教に功利を惡む者は先づ此の心あれば則ち功利を得ず、不真不久を得るのみと雖も、本と功利を惡むに非ず、功利を惡む者は真正悠久の功利を得せしめんと欲する者なり、堯舜の治も功利に非ずや、筮占の本旨は吉凶悔吝の計に非ずや、宜しく思を致すべしと。

七、劉氏は孝徳を以て靈符を感受す

或人問ふ、劉氏傳授の事は恢誕に涉る、如何ん。曰く、然らず、按ずるに孝順事實録の三綱行實に此等の事甚だ多し、董永叔謙の事は其の尤なる者なり、亦た奚んぞ疑はんや。曰く、劉氏に何の陰徳ありて此の靈感ありしか。曰く、劉氏が人と爲りは考ふべからずと雖も而かも天が之に像を與ふれば則ち其の徳は知るべし。願ふに其の性は至孝にして家貧し、是を以て此の靈感ありしか、至孝の外に別に天心を感すべき者なければ則ち其の徳は想ふべし。

八、靈像に神仙の字を加ふるは後人の附會なり

或人問ふ、易神の靈像にして神仙を以て題する者は何ぞや。曰く、文帝は神仙を好む、故に神仙の字を加ふるなり、凡そ家道は皆な易を以て本として神仙を以て附會す、本とは然らずして後に加へしこと疑なし、傳授の天使は方士にあらず、而るに書するは則ち尤も其の後人の加號を證すべきなり、又た此れを以て吾儒の眞天心を見るべしと。

九、靈像祭祀は何人も之を行ふべし

或人問ふ、靈像の祭祀は國家の郊類に似たり、僭踰に非ずや。曰く、社宜の祭は天子より以

て庶人に至るまで、之を行ふことを得れば即ち上帝を祀るの禮は闕くべからず。然れども天は尊く、獨にして對なし、故に郊類通して行ふの法なし、君親づから之れに臨むは厚きこと之れより大なるはなし。是を以て豺獾の賤しき者と雖も魚獸を祭るを知る、而るを況んや萬物の靈をや、此れ乃ち靈像祭祀の由りて制作する所なり、人々が報本の禮を行ふことを得て國家の郊類に借せず、制作の精義は神に入ると謂ふべし。願ふに三代の俗は通じて之を行ふと雖も暴秦に至りては傳はらず、是を以て漢儒は知らずして禮書に載せず、天は此の法の泯没を憂へて劉氏に與て、而して復た世に傳ふ、然れども鎮宅と爲して之を傳ふるが故に世俗は只だ鎮宅靈符と爲す、儒者は符章に泥みて之を神仙に附して察せず、是を以て靈像の眞術は晦盲否塞して吾子の疑を生ず、歎するに勝ふべけんや。

十、消災受福を論す

或人問ふ、按ずるに符章の下の細註は悉く皆な消災受福の事なり、之に奉事する者は人々皆な其の應を得べきか。

曰く、禍福壽夭は本と皆な一定の命ありて人力を以て變すべからず、然れども正あり變あり而して又た生の初に由る者あり、生後の行に由りて受る者あり、凡そ人は初生の命に隨ふ而かも生後の行に由りて命を受けざる者は鮮し、若し能く誠敬を以て奉祀すれば則ち生後の行に由ることなくして命を受くる者は天定の禍福壽夭は免がれ易からず、然れども受福（此二字疑）免禍等の事あれば則ち能く奉祀の誠を盡し、内外十六景の累なければ則ち天定の禍災と雖も亦た變消すべし。若し變消することなくんば、必ず身後の幸あらん、願ふに七年の病を以て三年の艾を求めば其の功を百倍するに非ざれば以て救ふに足らず、其れ畏敬して勵勤せざるべけんやと。

藤樹先生の年譜を案するに寛永十七年庚辰、先生三十三歳、是年夏、太乙神經を撰せんとし未だ脱稿せず、亦疾に罹りて止む、此年翁問答を著はし、此冬王龍溪語録を得たりと、然れば先生が太乙神を祭らんとしたるは陽明學に入りし以前に在りしなり。三十三歳以後は先生が陽明學に轉するの時期なれば太乙神に就ての考も此所に至て中止せしものと見て此後には何等の記事なし、蓋し先生思想の朱子學より陽明學に轉換するの時期にして太乙神を説かず却て良知を以て宇宙の主宰道德の本源と爲す王陽明先生の説を信奉したるならん。之を概括的に考察す

れば先生が太乙神を祭るに熱心なりしは佛教の語を假りて言へば猶ほ小乘的見地に在りしなり、陽明學に入りて良知を以て小宇宙大宇宙を一貫する大乘的の進境に達したるならん、先生が良知説を信奉せしことは別に之を説くべし。先生の太乙神を祭らんとしたることは寛永十七月八月にて先生が年三十三歳の時にして此冬王龍溪語録を得たり、而して先生の歿年迄は八年あるも此間に太乙神を祭れることなきに似たり。又た太乙神經を續て作りたる記事も見えざれば、此年以後に思想は進て陽明學の見地に入り此祭祀は中止したるものならんかとも思はるゝなり。

第四章 鬼神論

鬼神の二字は之を哲學的に解する者あり、宗教的に解する者あり。宋の程伊川が鬼神は天地の功用にして而して造化の迹なりと解し、又た宋の張橫渠が鬼神なる者は二氣の良能なりと解したるが如きは則ち是れ哲學的に見たる説なり。朱晦庵が鬼神を解して「二氣を以て言へば則ち鬼は陰の靈なり、神は陽の靈なり、一氣を以て言へば則ち至りて伸ぶる者は神と爲り、反つ

て歸る者は鬼と爲るも其の實は一物のみ」と謂へるは哲學的たると同時に宗教的たる見解にして陰陽の靈を説けるなり、陰陽の靈は即ち宇宙の神靈を指すに外ならずして唯だ陰陽を以て形而下の器なりと見るとは大に同じからずして、氣といふ物質的なる元素の外に造化作用を爲す所の神靈を認識せる者なり。即ち氣を指して鬼神と爲すべからずして而して氣の中に鬼神の在るありと云ふの意味なり。此の神靈あるが故に孔子は鬼神の鬼神たる所以の徳の盛大なるを讃歎されたるなり。子曰、鬼神之爲_レ徳其盛_レ矣乎（中庸）、とは先づ概括的に鬼神の盛徳を稱したるものにして、其の盛大なる功用は次に之を示されたり。爲徳の二字は朱晦庵之を解して「徳たるとは猶ほ性情功效と言ふが如し」と謂へり。即ち鬼神の鬼神たる所以と云ふに同じきなり鬼神の徳を讃歎するは即ち宇宙の神靈を讃歎するものなり。其の讃歎さるゝ所の鬼神は形狀聲臭なきものなれば之を視て而して見えず、之を聽て而して聞えず、物を體して而して遺すべからざるものなり。物を體して而して遺すべからずとは朱晦庵の解して「物の終始は陰陽の合散の所爲に非ざることなし、是れ其の物の體と爲りて而して物の遺すこと能はざる所なり、其の物を體すると云ふは猶ほ周易に所謂『事に幹たる』といふが如し」と謂へるの意義なり、其の

文に視_レ之而弗_レ見、聽_レ之而弗_レ聞、體_レ物而不可_レ遺とあり、是れ即ち造化作用の廣大無限にして精微玄妙の言語に絶するを云へるなり。約言すれば天地間の如何なる物も皆な此の無形無聲なる鬼神の作用に依りて造られざるものなしとの意なり。上述の如き絶妙不可思議なる鬼神の徳即ち宇宙の神靈を哲學的に解することを得ると同時に又た宗教的に之を見ざるべからざるものあり。即ち宇宙間に祭らるべき鬼神の存することは決して否認すべからざるものにして古今東西の事實に徴して明瞭なりとす。其の祭祀を享受すべき鬼神は諸種あるべきも之を大別すれば天神地祇人鬼なり、多神教の中に於ても其の種類は固より一ならず、我が國の古來祭れる神の多きことも八百萬神といふ語に徴するも知るべきなり。

支那印度其他諸國人の祭る所の神は非常なる多種あるべきならん。其の種類は無數なりとするも人をして敬虔尊崇の誠意を盡くして祭らるべき鬼神には皆な共通なる神靈の存せざるはなし。其の鬼神は能く天下の人をして齋戒沐浴盛服して以て祭祀に事へ奉らしむるものあり。其の形聲は無けれども洋々乎として威勢盛大にして祭者の上に在ますが如く、其の左右に在ますが如し。其の文に使_三天下之人齋明盛服以承_二祭祀。洋々乎如_レ在_二其上。如_レ在_二其左右とあり、

孔子は更に祭祀を鄭重に行ふべきことを示さんが爲に詩經の句を引用して神の髣髴として來るときも無形無聲なれば視聽すべからざれば測り知るべからず、況や之を厭ふべけんやとて、深く尊敬の念を致すべきことを示せり、即ち其の詩に曰く、神之格思、不可_レ度思、矧_レ可_レ射思と、凡て鬼神の尊敬すべきは天神地祇人鬼を問はざれども又た其の中に自ら輕重の差異なきに非ず、近く人鬼より之を説かん、人鬼とは人の死して鬼と爲れる者たること明かなれども、其の鬼に自ら尊卑ありて一様ならず、死後直に忘れらるゝ鬼あり、永く子孫に祭らるゝ鬼あり、且つ死後幾百千年を経て愈々廣く益々厚く世間の人に祭らるゝ鬼あり。又た無限に世界的に廣く尊奉せらるゝ鬼ありて、人鬼中の差異も亦た驚くべきものあり。

今更に進で人鬼に就て熟考するに列子莊子等の書中にも魂は天に歸し魄は地に歸すと曰へり。此の語即ち人の死して後に形體は土地に歸し、精神は天に歸することを示せるなり。換言すれば小神靈が宇宙的大神靈に復歸することを示せるなり、列子莊子の所謂天とは神靈の別名に外ならず。物質的なる形體が埋藏或は燒散に由りて人體を離るゝを以て地に歸すと曰ふは當然の事なり、物理學の物質不滅論、化學の勢力保存論より見れば固より消滅には非ざれども、凡

そ一定の形體より散逸して全く形の異なりたる物に變すれば之を死滅と謂ふは必しも不可ならず。神靈に於ても亦た然り。小神靈が大神靈に復歸するを名けて死と謂ふべけれども、之を大觀する時は唯だ大神靈たる根元體に復歸統合されたるのみ、故に靈魂は之を不滅と言ふも又た滅盡と言ふも、唯だ觀る者の大觀と小觀に由りて異なるのみ。換言すれば神靈の人體を離れて大神靈たる天に歸るを小觀して之を靈魂は死と共に滅すと謂ふも可ならん。然れども人天通融の大觀より言へば唯だ大神靈の根元體に歸着したるのみなり。故に之を靈魂不滅と言ふも亦た矛盾には非ざるなり。猶ほ更に聖賢凡愚の死後に就きて考ふるに死後直ちに忘却さるゝ者あり、五十年にして忘却さるゝ者あり、百年にして忘却さるゝ者あり、千年二千年を経て忘却さるゝ者あり、萬世に亙りて愈々廣く世人に知られて尊奉さるゝ者ありて其の差異は殆ど名狀すべからず、其の理由は即ち左に述ぶるが如し。

凡そ人の世に生るゝにも其の身心に稟受する所固より一樣ならず。所謂力量氣魄の大小、及び神靈的作用の大小強弱等實に千萬無量の差異あり。其の言行の高下、其の事功の優劣は則ち生時に於て勢力感化の強弱廣狹を見るのみならず、其の死後に於て祭祀尊敬を享受するの長短

を生ずるものなり。換言すれば死後に於て長く且つ廣く祭らるゝは則ち其の後人に感化力を及ぼすの廣大なるに由るものなれば、死後に於て永久に記憶され尊敬さるゝは則ち其の心身の偉大なりしを證するものと謂ふべきなり。然れば若し虚偽の言行に由りて一時的尊敬を博し、或は迷信の煽動に由りて暫時の祭祀を享受すと雖も斯かるものは必ず遠からずして敗滅に歸せんのみ、此の間に於ては毫末の虚偽を容れず、必定因果律に支配され其の實力實功に正比例を以て記念され尊敬崇拝さるゝものなり、是れ即ち宇宙自然の大法に従ふもの豈に疑を其の間に容るべけんや。孔子釋迦耶穌等の聖人が永く世人に尊崇さるゝは則ち其の感化力の偉大なるに因ること誰か之を否認すべきぞ。

尙ほ鬼神に就ては宋の陳北溪の性理字義及伊藤仁齋の語孟字義を参考すべし。新井白石の鬼神論も極て詳密なり。

393
756

昭和八年四月十五日印刷
昭和八年四月二十日發行

宇宙論 衛
定價金三十五錢

不許
複製

編輯兼 磯部 榮一

發行者 東京市芝罘町一丁目七番地

印刷者 岩本 菊雄

印刷所 東京市芝罘町一丁目七番地 研文社

發行所

東京市豊島區池袋三丁目二百五十八番地
東亞研究會
電話東京五八九二九番

終